本庄市の文化財

～散策ガイドブック～

本庄市教育委員会

本庄市の文化財
～散策ガイドブック～

２０１７

本庄市教育委員会

序

文化財は、過去と現在を結ぶ架け橋であり、はるか昔にも人々がいて、それぞれの暮らしを営んでいたことを思い起こさせてくれるタイムマシンでもあります。

『本庄市の文化財』は、旧本庄市と旧児玉町の合併後初の歴史と文化財を紹介する冊子として、平成21年３月に初版が発行されました。
初版発行から８年が経過し、県や市の指定文化財も徐々に追加されてきたことから、今回新たに第２版を発行することといたしました。

本書でご紹介する文化財は、国指定史跡である塙保己一旧宅をはじめ、埼玉県や本庄市の指定及び国登録文化財の計139点であります。いずれも本庄市の長い歴史と先人たちの叡智や優れた技術、そしてそれらを今も継承している多くの方々の熱意が感じられるものばかりであると改めて感じております。
本書の編集に当たっては、写真はできる限り新しいものを使用し、解説文も正確であることはもちろんですが、なるべく分かりやすい文章にするよう心がけました。

パソコンやスマートフォンなどの進化と普及により、時代はどんどん便利になってゆきますが、しばし古（いにしえ）の世界に思いを馳せ、ときには本書を片手に文化財巡りをしてみるのもいかがでしょうか。

本書が、市民の皆様はもとより、多くの方々に広く愛読され、郷土の歴史や文化に興味を持つきっかけとなり、あるいは郷土史の研究や学習活動の一助として活用されれば、これほどうれしいことはありません。

平成29年３月吉日

本庄市教育委員会
教育長　勝山　勉

目　　次

序
目次・例言

１．本庄市の文化財解説　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

２．本庄地域市街地の文化財　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

３．本庄地域北部の文化財　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39

４．本庄地域南部と児玉地域北部の文化財　・・・・・・・・・・・・・・・・・・47

５．児玉地域市街地の文化財　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57

６．児玉地域中部の文化財　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・73

７．児玉地域南部の文化財　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83

８．本庄市の指定文化財・登録文化財一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・・95

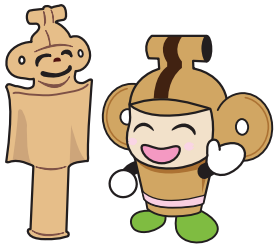
文化財地図

例　　言

１．本書は、市内に所在する指定文化財及び国登録文化財について解説したものです。
２．本書は市内を６区域に分けて、区域ごとに指定文化財を収録しました。
３．本書に収録した文化財について、日常的に見学が出来ないものも含まれています。
　　また他の文化財においても、見学にあたっては所有者・管理者の許可が必要なものがありますので注意が必要です。
４．平成 28 年発行の「ほんじょう文化財ガイドマップ」と併せてご利用ください。

本庄市の文化財解説

－本庄市の歴史と文化財－



原始（先土器・縄文・弥生時代）

本庄市内で人類が活動をし始めた歴史は古く、先土器（旧石器）時代にまで遡ります。大久保山丘陵の浅見山Ⅰ遺跡で発見された黒曜石の石器群は、およそ２万年前と推定され、本庄市内では最も古い人類の遺物です。

浅見山Ⅰ遺跡から出土した石器

縄文時代は日本列島で人々が土器を使い始めた時代で、その始まりは今から１万6000年ほど前に遡ります。本庄市内でも浅見山Ⅰ遺跡や宥勝寺北裏遺跡、長沖古墳群梅原地区遺跡などで縄文時代早期の土器片が確認されています。縄文時代前期になると児玉丘陵を中心に、人々の定住を示す竪穴住居跡を伴った集落遺跡が増えてきます。気候が温暖化して、クリやドングリなどの植物が増え、食料の確保が容易になったことが人口の増加につながったと考えられます。縄文時代中期に入ると本庄台地上にも集落の進出が認められるようになります。とくに現在の児玉工業団地内で確認された将監塚、古井戸、新宮の３遺跡は、いずれも直径200ｍほどもある大規模環状集落です。つづく縄文時代後期や晩期になると丘陵上の集落が減少し、本庄台地上の環状集落も縮小するなど遺跡の減少傾向が顕著になります。

新宮遺跡（児玉町共栄・上真下）出土縄文土器

弥生時代は大陸から稲作や金属器の文化が北海道を除く日本列島の各地に伝わり、本格的な農耕社会に移行した時代とされています。本庄市内に弥生文化が波及したのは紀元前３世紀頃とやや遅く、弥生時代中期になってからのことで、集落遺跡はまだ見つかっていませんが、浅見山Ⅰ遺跡では、お墓と推定される土坑が発見されています。弥生時代後期になると、大久保山丘陵や児玉丘陵で谷筋の水田化が進み、山根遺跡、真鏡寺後遺跡などの小規模な集落が展開するようになります。

浅見山Ⅰ遺跡出土弥生土器

古代（古墳時代）

古墳時代に入ると女堀川流域に広がる低地帯の開発が進み、集落遺跡も増えて、人口が急速に増加している様子がうかがえます。古墳時代前期には、生産力の向上 を背景にして**鷺山古墳**、前山１号墳といった前方後方墳や前方後円墳、北堀新田前２号墳などの前方後方形周溝墓が造られるようになります。

物見塚古墳（生野山古墳群）

古墳時代中期初頭（４世紀後半）には、旭・小島古墳群に**石製模造品**の優品を出土した**万年寺つつじ山古墳**や箱形石槨が検出された**万年寺八幡山古墳**など方墳や円墳が現れ、やがて中期中頃（５世紀前半）になると**金鑽神社古墳**や生野山将軍塚古墳、公卿塚古墳のような直径 60m を超える大型円墳が相次いで造られるようになります。この頃になると、女堀川周辺ばかりではなく、台地の開発も進んで、**二本松遺跡**や夏目遺跡、東五十子城跡遺跡、真鏡寺後遺跡など新たな集落遺跡が形成されています。この頃の集落遺跡のなかには、鉄器生産に関係する資料を出土する住居跡も見られることから、新しい技術を携えて遠方から移入してきた人々も多かったようです。

古墳時代後期になると、埋葬施設に横穴式石室がされ、副葬品の組合せが変わるとともに多種多様な形象埴輪が造られるようになるなど、古墳の様相が大きく変化します。**秋山庚申塚古墳**からは金銅製馬具をはじめとする多くの副葬品が検出されています。旭・小島古墳群では**山の神古墳**、**蚕影山古墳**が相次いで築かれ、**小島前の山古墳**では**盾持人物埴輪**、**御手長山古墳**からも**人物埴輪**が出土しています。また、古墳時代中期末（５世紀第４四半期）から終末期（７世紀）にかけて、西五十子古墳群、塚本山古墳群、**長沖古墳群**、**秋山古墳群**など数 10 から 100 基以上の数の古墳からなる群集墳の形成が見られます。なかでも長沖古墳群は、総数 200 基を超える埼玉県内最大規模の群集墳として知られています。

薬師堂東遺跡出土ガラス小玉鋳型（完形品）

古墳時代後期（６世紀）から終末期（７世紀）にかけての集落遺跡も、中期に続いて女堀川流域を中心に広く分布します。それらの中には７世紀前半のガラス小玉鋳型を大量に出土した薬師堂東遺跡のように、特殊な手工業製品の生産に関わった集落も認められます。なお、古墳時代終末期も後半になると従来の集落立地に変化が生じ、伝統的な集落が解体・再編される一方で、台地上に新たな大規模集落が現れて、やがて奈良時代の律令社会を迎えることになります。

古代（奈良・平安時代）

奈良時代に入ると本庄市の大部分は武蔵国児玉郡に編入されます。神流川から分水された「九郷用水」が整備されたのもこの時代と考えられ、条里制の施行に伴い、この「九郷用水」を幹線水路として、女堀川周辺の耕地が四方田条里、今井条里、児玉条里などと呼ばれる条里水田として整理されていきました。また、この段階は律令制度の定着とともに地方の行政組織も整って文字の普及が進みます。薬師元屋舗遺跡では「武蔵国児玉郡草田郷戸主大田部身万呂」、枇杷橋遺跡では「武蔵国児玉」の刻線による文字が記された石製紡錘車が出土しています。さらに、山崎上ノ南遺跡からは宝亀２年(771)に檜前部名代女に貸し付けた出挙の稲四十束の収納を税長大伴国足が確認したという内容が記された**寶龜二年銘木簡**が発見されています。この山崎上ノ南遺跡のある飯倉地区の谷筋には、国分寺創建期の瓦を生産した飯倉窯跡や金草窯跡、製鉄遺構、炭窯などの各種生産関連遺跡も集中し、古代児玉郡の官営工房が所在したことが想定されます。また、堂塔伽藍をもち、国分寺創建期の瓦や仏像の螺髪を出土した東小平中山廃寺のように、地域の有力者による私営の寺院も造営されています。

東小平中山遺跡の塔跡

一方、奈良時代の集落の形態は、条里水田に接する台地上に大規模な集団を形成して多くの人々が集住する傾向が顕著です。条里制に伴う水田区画の整備とともに、集落にも計画的な配置が貫徹されていたようです。しかし、平安時代に入ると律令制度の弛緩とともに、これらの集落は徐々に分散して行き、10世紀にはほぼ解体してしまいます。また、この頃には住居形態の変化とともに、検出される竪穴住居も数を減らし、やがて11世紀になると古代の集落は、遺跡としてほぼ痕跡を残さなくなります。

中世（平安末～鎌倉時代）

平安時代も末期になると、関東各地で武士団が形成されるようになります。後世に「武蔵七党」と呼ばれる武士団が誕生し、武蔵国北部においても児玉党と呼ばれる武士団が誕生します。児玉党は阿久原牧（児玉郡神川町）や児玉庄という荘園を経済的基盤とした武士団で、児玉党一族の本貫地は、本庄市内の本庄・久下塚・四方田・牧西・河内・蛭河・今井・塩谷・児玉・真下など旧村落を名字の地としていました。

真鏡寺中世館跡（児玉町塩谷）

児玉党武士の基盤は、九郷用水の流末や生野山丘陵の南側、あるいは扇状地の広い後背地を控え

た地域や児玉地域の丘陵部に広く分布していて、児玉党一族の中心的な基盤が九郷用水灌漑区域の周辺部分を主とするものであったことが窺えます。また丘陵部より少し奥に入った山地部分の河内地区でも、河内寺山廃寺があって、堂宇の四隅に吊される**風鐸**が出土していることから、格式のあった寺院の存在が推定され、児玉党河内氏との関係も推定されます。この時期の児玉党の活動は九条兼実の日記『玉葉』に、安元元年(1175)に児玉庄が上野国高山御厨を押領して訴えられた記事を載せています。児玉党は上野国西部にも一族を分派していますが、このような事件も児玉党の上野国進出と何らかの関連があるのかも知れません。

児玉地区の市街地部を南北に鎌倉街道上道が通過しています。『曽我物語』の一本には児玉宿が記載されていて、生野山南側に古い宿場があったものと思われます。現在、市街地の新町にある實相寺は本尊が県指定文化財の「**阿弥陀如来三尊座像**」で、寺伝によれば戦国時代に雉岡城主夏目豊後守定基の勧めにより生野山より移転したと伝えています。

鎌倉街道上道（八幡山地内）

中世の信仰を見ると、鎌倉時代を通じて板碑（板石塔婆）が数多く造立されています。山間部の本泉地区元田は河内のすぐとなりの地区ですが、全国でも稀な大型の板碑が残っています。正嘉２年(1258)銘を持つ**三連碑**で、高さが200cm余、幅は116cmもあり、造立者はかなりの有力者ではないかと推定されます。また児玉地区の玉蓮寺には児玉党武士の児玉時国と日蓮上人の伝承が残されていて、墓地には**嘉元２年(1304)銘の大型の板碑**があって児玉党との関係が窺えます。また市内には大量の石造物が残されており、秋平地区小平のほてい堂には鎌倉時代に造立されたと思われる大型の**五輪塔２基**があり、北泉地区栗崎の宥勝寺も児玉党との関係の深い寺で、墓地には一の谷合戦で討ち死にした**荘小太郎頼家の供養塔**が残されています。さらに児玉党関連では蛭川地区の釈迦堂墓地に、一の谷合戦で庄四郎高家に生け捕られた（『平家物語』）平三位中将**重衡の首塚**が残されています。この他にも市の北端の仁手地区小和瀬に宝治元年(1247)の**自然石塔婆**があり、金屋地区保木野には乾元２年(1303)の**円形光背を持つ図像板碑**があって、武蔵武士の熊野信仰の隆盛とともに信仰の高まりが認められます。

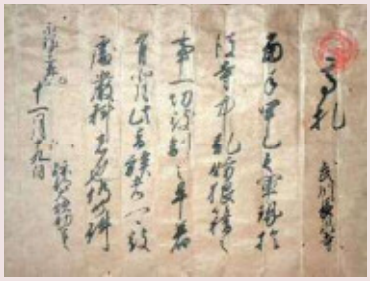
中世（南北朝・室町時代～戦国時代）

南北朝の動乱期を経て室町時代に入ると、児玉地域の八幡山の独立丘陵上に**雉岡城**が築城されます。この場所はかなり早い時期に武士の館が設けられたと考えられますが城として整備されたのは室町時代も末期頃と思われます。

雉岡城跡

雉岡城は鎌倉街道上道と上杉道の分岐点の内側に位置していて、交通の要所にあたります。この時代は関東各地は度々の戦乱の場となり、この地域は

関東管領山内上杉氏とその家老職であった長尾氏の関係の強い地域でした。関東管領山内上杉顕定によって雉岡城が築かれ、その後、家臣の夏目豊後守定基が城主となっています。長禄元年 (1457) に古河公方に対抗して五十子陣が起こると、雉岡城は上杉方の後方支援基地的な役割を持った可能性もあります。やがて戦国時代になり後半になると関東管領上杉憲政は越後の長尾景虎 (上杉謙信) を頼って越後に逃れ、関東の多くは後北条氏の勢力下に入ります。弘治２年 (1556) には児玉郡の北部段丘上に本庄実忠によって**本庄城**が築かれます。本庄氏は鎌倉時代より続く児玉党本庄氏の後裔と思われます。本庄氏も当初は関東管領上杉氏の配下でしたが、後北条氏の武蔵進出に伴い後北条氏の勢力下に組み込まれました。



武田家高札 (長泉寺文書)

この時代のこの地域の様子を伝えるものに戦国大名が発給した朱印状や判物と呼ばれる文書が残されていて、永禄４年 (1561) の河越合戦の様子を伝える**福田家中世文書**や、永禄 12 年 (1569) と翌年に出された武田家禁制と北条家制札 (**長泉寺中世文書**) は、武田氏の武蔵侵攻と後北条氏の動静を今に伝えています。外にも天正 15 年 (1587) の北条氏邦朱印状 (**鈴木家中世文書**) はこの地域の重要な用水路である九郷用水の記述が見られ戦国時代の様子を教えてくれます。また金屋地区には室町時代に鋳物師集団が発生し、この時期の作品を残していますが、北条氏はこの鋳物師に伝馬手形 (**倉林家中世文書**) を発給して交通の整備と組織化を行っています。

戦国時代になると板碑の造立は大幅に減少し、やがて造られなくなります。逆修による供養塔や墓石などの目的には五輪塔や宝篋印塔、さらに石幢などの石造物が引き続いて造立され、小平の成身院には戦国時代の歴代住職の五輪塔が残され、市内各地の寺院には戦国時代の五輪塔や宝篋印塔が残されています。秋平地区の吉野家墓地には室町期の**六面重制石幢**が残され、秩父郡から児玉郡、さらに上野国に広く分布するこの形式の石幢が注目されます。五十子陣の舞台となった五十子には文明元年 (1469) 銘の**石造十一面観音坐像**があり、銘文にある「道徳」は『松蔭私語』の作者の松蔭西堂のことといわれています。

風洞の石幢

戦国時代も末期、天正 18 年に豊臣秀吉が小田原攻めを行うと、後北条方であった雉岡城と本庄城は相次いで落城し、やがて小田原本城も開城して後北条氏は滅亡します。翌天正 19 年には秀吉は大規模な国替えを実施し、徳川家康を後北条氏の跡の関東に転封させました。家康は関東各地に家臣を配置して領国支配を行います。家康は各地で検地を実施し、実際、児玉村や宮戸村では天正 19 年の検地帳が残されています。家康は、雉岡城には松平清宗・家清父子を、本庄城には小笠原信嶺を配置しました。

近世（江戸時代）

後北条氏の滅亡から徳川家康の関東入国をもって、関東地方は近世（江戸時代）という新しい時代へ移っていきます。本庄の地も一代変革を遂げることになります。

江戸時代に入ると幕府は五街道の整備を行い、中でも本庄地域を通過する中山道が整備されます。

田村本陣の門

中山道の開通により本庄宿が成立します。宿には本陣・脇本陣が整備されますが、現在、二つの本陣の一つ**田村本陣の門**が残されています。宿の整備・発展に伴って、神社・寺院も整備されます。宿の西端には金鑽神社が勧請されましたが、小笠原信嶺の孫で関宿城主の小笠原忠貴（政信）が社殿を建立しました。その**寄進状**が残されています。また別当寺の威徳院の**大門**も残されています。寺院では東富田村にあった安養庵が本庄宿に移され安養院となり、次第に伽藍が整備され、**総門・山門・本堂**が整備され、現在にその偉容を伝えています。また円心寺には二代城主の小笠原信之が父の冥福を祈るため円心坊を開きましたが、後に豪壮な**鐘楼山門**が建設されています。

開善寺

江戸時代に入って本庄地域は本庄城に小笠原氏が入城して新たなる時代を迎えました。小笠原信嶺は宿内に菩提寺の開善寺を開き、寺には小笠原氏と極めて深い関係にある**清拙正澄の画**を納めました。開善寺は武田信玄公との関係も深く、**信玄公画**も所蔵しています。信嶺は慶長３年 (1598) に没し、開善寺に葬られ、現在、**信嶺夫妻の墓**が並んで建っています。信嶺の後は養子の信之が跡を継ぎます。しかしながら慶長 17 年 (1612) に下総国古河城へ転封し本庄を去りましたが、同 19 年に古河城にて没し開善寺に葬られました。その**信之の墓**も同寺に残っています。

一方、児玉地域では中山道脇往還川越道が市内の八幡山町と児玉町を通り、この二町はあたかも一町のごとく家並みが連続していました。児玉の八幡神社には街道の中央にあったという**高札場**が今も残されています。この八幡山の地に雉岡城はあり、松平清宗・家清父子が入城しますが清宗は間もなく亡くなり家清が城主となります。この頃には雉岡城は八幡山城と呼ばれたようです。松平家清は城下の整備に着手しますが、関ヶ原合戦の翌年の慶長６年 (1601) に三河国吉田（愛知県豊橋市）に転封となり、松平氏と八幡山城との関係は終わりをつげ、城は以後廃城となりました。

八幡神社の青銅製鳥居

江戸時代の児玉には八幡神社が鎮座しますが、中世においては八幡山の地にあったものと思われ、雉岡城の築城によって現在地に移されたものと思われます。現在の**社殿と青銅製の鳥居**は享保期の造立ですが、以後、**随身門**や**能楽殿**が整備されました。能楽が催され**能面**と**能装束**も残されています。

江戸時代は文化面でも様々な分野で大きな発展を見ました。また多くの文人達が活躍した時代でした。俳句の世界では本庄宿の豪商戸谷半兵衛（中屋）は自ら俳人としても活躍し、また俳句宗匠を援助するなど文化面で大きな活躍をしました。児玉出身の俳人久米逸淵は春秋庵系の俳人で、高崎で活躍した後江戸へ出て活動しました。晩年本庄宿へ移り、没後郷里の児玉町の玉蓮寺に葬られました。墓地には逸淵の墓と句碑が残されています。

交通量の増大で賑わった本庄宿では、料亭紅葉屋を営んだ小倉紅於が、交流を持った多くの文人達の遺墨を石に刻み、**小倉家墓碑群**として現在に伝えています。

小倉家墓碑群

画家では武正南廬や、上州島村出身の金井烏州らが活躍し、貴重な作品を残しています。また地元出身の刀鍛冶長谷部若狭守国治は**大正院の不動剣**や**短刀**を作刀しています。

延享３年(1746)に児玉郡保木野村で生まれた塙保己一は７才で失明し、江戸に出て当道座に入門し、晩年には総検校に昇進しましたが、盲目の国学者としても有名で、『群書類従』の編さんや和学講談所の設立など多大な業績を残しました。郷里の保木野には生家である**塙保己一旧宅**が残り、児玉にある塙保己一記念館には**遺品と関係史料**が展示されています。

江戸時代は安定した時代で信仰面でも色々な宗派が民間に広まるなど発展した時代でした。金屋の天龍寺には地元金屋鋳物師の作品である**銅鐘**が残り、天明３年(1783)に起きた浅間山大噴火の犠牲者を供養するために小平の成身院に**百体観音堂**が建設されています。さざえ堂とよばれる独特な建築様式をもつ仏堂です。また民間では市内各地に獅子舞が伝えられ、**台町の獅子舞**や**小平の獅子舞**、さらに**仁手諏訪神社の獅子舞**、**今井金鑽神社の獅子舞**、**吉田林の獅子舞**は今でも活躍しています。

近代・現代（明治～昭和）

幕末期の安政６年(1859)に我が国は長く続いた鎖国政策を解き開国し、横浜を開港しました。諸外国との貿易が始まると我が国の主要な輸出品は生糸と蚕種でした。生糸と蚕種が高値で取引されると当然ながら養蚕業が脚光を浴びることになります。また繭から糸を取る製糸業も同様に発展することとなります。明治５年(1872)に官営富岡製糸場が開業すると、そこに繭を供給するために本庄町の繭市場がより一層賑わうことになりました。

本庄商業銀行と煉瓦倉庫

大量の繭や絹を取引するために資金が必要となり、資金を供給するため明治27年(1894)には本庄商業銀行が設立されました。同銀行では大量の担保用の繭を保管するために**煉瓦倉庫**を同29年(1896)に建設しています。また本庄町でいち早く郵便制度を取り入れて諸井泉衛が郵便局を開局し、

泉衛は火災焼失した自宅を明治 16 年 (1883) に再建する際に、洋風の構造や装飾等を取り入れた**諸井家住宅**を建設しました。また郵便局も二代目の庁舎は昭和９年 (1934) に洒落た装飾や洋風の外壁を持つ**本庄郵便局舎**を建設し今も仲町郵便局として使用されています。

諸井家住宅と初代郵便局舎

同じ頃、児玉町では養蚕改良と普及に情熱を燃やす木村九蔵が活躍しています。九蔵は明治５年 (1872) に新しい蚕の飼育法である「一派温暖育」を考案し、同 10 年 (1877) には養蚕改良競進組を組織し、同 17 年 (1884) には競進社に組織を拡大させています。また明治 27 年 (1894) には児玉伝習所地内に**模範蚕室**を建設しました。

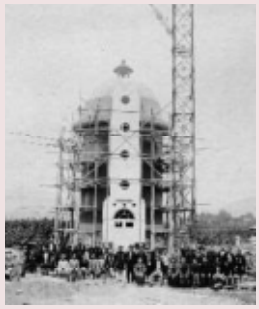
明治時代は産業面で大きな変革のあった時代ですが、それに関連して交通面でも大きな変革がありました。本庄市北部を利根川が流れることから、江戸時代は舟運が盛んで、三友河岸・山王堂河岸・一本木河岸等が設けられ、江戸へ物産が運ばれました。明治 16 年 (1883) に日本鉄道が敷設され本庄駅が開業すると、それまでの舟運より安全でかつ早い鉄道輸送が主力となり、沿線部には機械製糸の製糸場が進出します。本庄町は宿場町から商業都市に変貌し、同年に建設された**本庄警察署**はコリント様式を取り入れた和洋折衷のモダンな建物として現在も異彩を放っています。また一方ではこの時代自由民権運動の高まりや、不景気に伴う暴動も各地で起き、明治 17 年 (1884) には秩父事件が勃発します。児玉地域の金屋で起きた戦闘の「金屋戦争」として知られています。しかしながら本庄市地域の近代化は進行し、元小山川に架かる伊勢崎道の**寺坂橋**は明治 22 年 (1889) に石造アーチ橋として今も現役で使用されています。自動車の普及に伴い伊勢崎新道が開削されるとモダンな**賀美橋**が大正 15 年 (1926) に架けられました。

完成直後の賀美橋

児玉地域でも大正４年 (1915) に本庄・児玉間を結ぶ本庄電気軌道が営業を開始し、昭和６年 (1931) には八高線児玉駅が開業し、さらに利根川に坂東大橋が架橋されるなど次第に交通網が整備されていきました。また生活面でも同じ年に児玉地域の児玉市街地に近代水道が布設され、水道施設の**児玉町旧配水塔**が建設されました。さらに昭和 12 年 (1937) には児玉地域と現在の美里町北部地域から旧岡部町榛沢地域まで灌漑する児玉用水 (美児沢用水) の**間瀬堰堤**が建設されています。

なお、明治期以降、市内各地で伝統的民俗芸能が行われ、中でも神楽は盛んで、金鑽神楽が市内に伝えられ、**本庄組・宮崎組・杉田組・太駄組・根岸組**の５組が活動しました。さらに児玉地域では**西小平と元田**で**万作**が行われました。

本庄の金鑽神社と児玉の八幡神社の秋の祭典の際には、付け祭りとして豪華な**屋台や山車**が製作され、街中を引き回され秋祭りを一層豪壮な雰囲気にしています。


建設中の児玉町旧配水塔

本庄地域市街地の文化財

旧本庄警察署（埼玉県指定文化財）

本庄地域市街地マップ

本庄地域市街地の文化財について

本庄駅北口に広がる市街地は江戸時代以降急速に発展し、特に中山道の通過に伴い本庄宿が形成され、天保年間には中山道最大の宿場町となりました。文人の利用も多く、宿の有力者との交流や庇護のもと華やかな文化が開いています。その名残として田村本陣の門も残されています。宿の西端に位置する金鑽神社には、社殿の格天井絵に地元絵師の作品が見られ、安養院の小倉家墓地には多くの文人の遺墨が石に刻まれています。

明治以降は繭市場として町が潤い、明治 16 年に日本鉄道の開通後は、大規模な製糸工場が複数進出します。旧本庄商業銀行煉瓦倉庫はまさにその時代の貴重な遺構で、西洋建築の影響を受けた諸井家住宅や旧本庄警察署など見るべき建造物も残されています。

旧本庄警察署（きゅうほんじょうけいさつしょ）　1棟

埼玉県指定有形文化財・建造物
所在地　中央
時　代　近代

明治 16 年 (1883) に本庄警察署として建設された本格的なコリント式西洋建築です。二階のベランダにはアカンサスの葉を彫刻した柱を並べ、半円窓や天井の灯火掛けにはレリーフ彫刻を施すなど、各所にモダンな設計が見られます。

昭和 10 年 (1935) に新庁舎が建設され、そこに移転するまで使用されました。その間には大正 12 年 (1923) の関東大震災の際に起きた朝鮮人虐殺事件や、昭和 23 年 (1948) の本庄事件を体験するなど、まさに歴史の生き証人でもあります。その後は、本庄消防団本部、簡易裁判所、区検察庁、本庄公民館、図書館に利用され、昭和 47 年 (1972) に埼玉県指定有形文化財に指定されました。昭和 55 年 (1980)11 月からは、市立歴史民俗資料館となり現在に至り、市民に親しまれています。

アカンサスの葉の彫刻がある列柱

半円窓

諸井家住宅（もろいけじゅうたく）　1棟

埼玉県指定有形文化財・建造物
所在地　中央
時　代　近代

諸井家は本庄市を代表する旧家で、北諸井・南諸井・東諸井と呼ばれる三家があります。この内、東諸井家は明治初期の近代郵便制度発足に当たって郵便取扱役を務めました。東諸井家は近代以降も有能な人材を多く輩出しましたが、諸井恒平（もろいつねへい）は秩父セメントの創始者、書道の世界で著名な諸井春畦（もろいしゅんけい）、旧西武鉄道や秩父鉄道の役員の諸井四郎（もろいしろう）、外交官の諸井六郎（もろいろくろう）などがいます。彼らが育った住宅が県指定の文化財として残っています。

諸井家住宅は切妻桟瓦葺木造二階建塗屋造りという和風の造りを基本としながらも、小屋組は木造キングポストトラス組で、家の正面には洋風モチーフのベランダを持ち、色ガラスのアーチ窓を設けるなど各所に洋風の工夫が施されています。

諸井家の当主諸井泉衛（もろいせんえい）が出入りの大工を横浜まで連れて行って、横浜居留地の西洋館を実地見聞の上、この家を建てたともいわれています。建築年は不明ですが、泉衛の孫の諸井逸郎の詩文などから明治13年(1880)の建築と推定されています。

かなさなじんじゃしゃでん
金鑽神社社殿　1棟

埼玉県指定有形文化財・建造物
所在地　千代田
時　代　近世

金鑽神社は、中山道本庄宿の西端に位置し、本庄宿の総鎮守として崇敬された神社です。当社は弘治２年 (1556) に本庄城を築いた本庄実忠により勧請され本庄領の総鎮守になったといいます。その後、本庄城主となった小笠原信嶺の庇護を受け、中山道の整備に伴って現在の位置に鎮座したと推定されます。当社には寛永 16 年 (1639) に本庄城主小笠原信嶺の孫の関宿城主小笠原忠貴 (政信) による社殿寄進に係る祈願文が残されており、小笠原氏に長く信仰されてきたことがわかります。

社殿は流造の本殿と入母屋造りの拝殿を幣殿でつなぐ複合形式をとり、それぞれの部分の建築年代と建築様式が異なっており、建築様式の推移を窺う上で貴重な例となっています。本殿は享保９年 (1724)、拝殿は安永７年 (1778)、幣殿が嘉永３年 (1850) の建築と伝えられています。

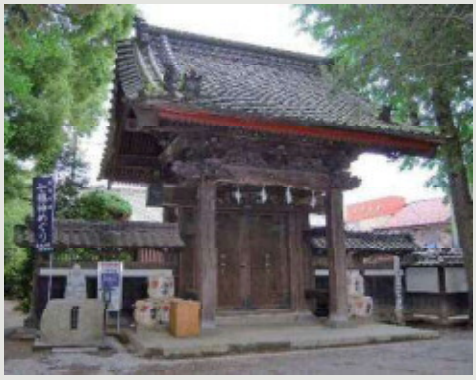
本殿は一間社流造で、身舎側面には彩色を施した空間をもって配されていることから、建築年代の伝承を裏付けるものとなっています。拝殿は入母屋造りで正面に千鳥破風、軒唐破風付きの向拝をもち、彫刻も豪華なものとなっています。幣殿は幕末期の様式の彫刻をもち、格天井には武正南廬や小倉紅於らの地元本庄宿の画家・絵師の手による天井画が奉納されています。

本殿部分

格天井絵

金鑽神社大門（かなさなじんじゃおおもん）　1棟

本庄市指定有形文化財・建造物
所在地　千代田
時　代　近世



この大門は隣接する金鑽神社の別当寺であった金鑽山威徳院白蓮寺の総門でしたが、明治維新の後に威徳院が廃寺となったため、金鑽神社が管理保存しています。この大門は文化11年(1814)の建立と伝えられています。がっしりとした四脚門で、瓦葺屋根を持つ総欅造りで、柱間地坪4坪(13.2㎡)です。頭貫木鼻や内法上部には隙間なく彫刻が配されていて、19世紀初期の作風を示す優れた例となっています。

田村本陣の門（たむらほんじんもん）　1棟

本庄市指定有形文化財・建造物
所在地　中央
時　代　近世

この門は、本庄宿の北本陣と呼ばれた田村本陣の門です。田村本陣は中山道より北側に50ｍほど中に入った所にあり、敷地は２反３畝14歩(約2,325㎡)ありました。

田村本陣については、寛永19年(1642)より記録が残されており、同家の古さが偲ばれます。幕末期には皇女和宮一行の宿所にも成りました。

明治25年頃に田村家は東京へ移住し、この門は群馬県の島村(現伊勢崎市)の田島家の所有となりました。後に同家から寄贈を受けて本庄市の所有となりました。現在は歴史民俗資料館の前に移築されています。

安養院本堂・山門及び総門　3棟
（あんようういんほんどう　さんもん　そうもん）

本庄市指定有形文化財・建造物
所在地　中央
時　代　近世

安養院は禅宗曹洞派の寺院で、その創立は戦国時代に遡ります。児玉党の後裔本庄藤太郎雪茂 (行重) が東富田に草庵を結んだのがその始まりといいます。その後、本庄の地に移転し、近世期には幕府より朱印地 25 石を賜っています。

本堂は安永８年 (1779) に焼失し、寛政２年 (1790) に再建されています。入母屋造りで間口 13 間半、奥行き 10 間半の規模を誇ります。現存する市内の寺院建築では最大の規模をもっています。

山門は元禄 15 年 (1702) の建築で、同院最古の建造物であり、間口４間、奥行き３間の規模を持ち、入母屋造りの二階建て楼門です。一階は左右に当初は仁王像を安置していましたが現在は四神像に替わっています。二階は十六羅漢像を安置します。

総門は享保元年 (1716) の再建といわれ間口２間で切妻造り桟瓦葺きです。

円心寺山門　1棟
（えんしんじさんもん）

本庄市指定有形文化財・建造物
所在地　本庄
時　代　近世

円心寺は浄土宗寺院で、寺の由緒によれば、本庄城主小笠原信之の実父である酒井左衛門尉忠次 (法名先投院殿廓譽円心大居士) の為に、慶長８年 (1603) に円心坊として建立されたといいます。その後、元禄６年 (1693) に要行山円心寺と改めたといいます。この山門は、天明年間の建立と伝え、木造二層建築の鐘楼山門です。楼門形式の仁王門ともいえますが、木割りを縦横に駆使した構造的にも最も発達した時期の山門といえます。

絹本着色清拙正澄画像　1幅

けんぽんちゃくしょくせいせつしょうちょうがぞう

埼玉県指定有形文化財・絵画
所在地　中央
時　代　中世

清拙正澄は鎌倉時代末期から南北朝初期に活躍した中国よりの渡来僧で、日本禅宗大鑑派の祖となりました。鎌倉建長寺や京都南禅寺の住職を勤め、信濃国守護小笠原貞宗の招きで信州松尾 (長野県飯田市) に畳秀山開善寺を開きました。その後、小笠原氏の分流で松尾城主の小笠原信貴が、飯田の開善寺を復興し、その子の信嶺が本庄城主となると本庄の地に飯田開善寺の中興開山をはたした球山宗温を招いて畳秀山開善寺を開きました。

本庄の開善寺に清拙正澄の頂相（ちんそう）が残された理由は不明ですが、本庄城主の小笠原信嶺は、父信貴が飯田の開善寺を復興したことに倣い、本庄の地に開善寺を開き、親子して開善寺に強い思い入れがあったものと思われます。そのため開善寺の開山の清拙正澄の画像を信嶺が求めたとしても不思議ではありません。この画像は上部の賛は切り取られていますが、14 世紀後半の南北朝期の作品と考えられ、たいへん貴重な肖像画です。

紙本着色武田信玄公画像　1幅

しほんちゃくしょくたけだしんげんこうがぞう

本庄市指定有形文化財・絵画
所在地　中央
時　代　近世

本庄の開善寺は武田信玄の弟逍遙軒信綱の子である球山宗温禅師が開山で、さらに本庄城主小笠原信嶺の奥方久旺院尼の兄という関係がありました。このように武田氏との関係が深い開善寺に武田信玄公の肖像画が伝わったのです。由緒に寄ればこの肖像画は織田信長の弟織田有楽齋長益の筆といいます。画風は土佐派のもので、制作時期は江戸初期と推定されます。この肖像画は古くから知られていて、文政 11 年頃の成立という『新編武蔵風土記稿』にも「信玄出陣の画像等あり」と記されています。

画像の法量は、縦 79㎝、横幅 42.2㎝。

絹本着色愛染明王画像（けんぽんちゃくしょくあいぜんみょうおうがぞう） 1幅

本庄市指定有形文化財・絵画
所在地　本庄
時　代　近世

愛染明王像を描いた仏画で、三眼で他の明王と同じく憤怒相です。手は一面六臂で、弓矢を持っています。頭には強さの象徴である獅子の冠をかぶり、蓮の華の上に半跏坐で座っています。愛染明王は密教における敬愛を表現した仏であるためその身色は真紅で、後背に日輪を背負って表現されることが多いようです。なお、画像下部の台座部分は愛染明王像部分と表現が若干異なっています。法量は、縦 77.5cm、横幅 39.8cm。

紙本墨画鍾馗之図（しほんぼくがしょうきのず） 1幅

本庄市指定有形文化財・絵画
所在地　銀座
時　代　近世

作者は本庄宿の画家の小倉青於です。文久元年 (1861) の作といわれます。小倉青於は幕末期に本庄宿で割烹旅館小倉屋を営み、その小倉山房にて多くの文人達と交流しました。自ら本庄の文化人の中心として活動し、高久隆古より画技を、大竹蔣塘より書を学びました。若年より名をなし、後に活動の場を江戸に移しました。

法量は、縦 150cm、幅 59cm。

木造阿弥陀如来三尊来迎仏（もくぞうあみだにょらいさんぞんらいごうぶつ） 3躯

本庄市指定有形文化財・彫刻
所在地　千代田
時　代　近世

この阿弥陀如来三尊像は、もと中山道の西端にあった万日堂迎接庵という仏堂の本尊であったと伝えられています。万日堂の火災に際して運び出されたといわれています。

阿弥陀如来は坐像で、脇侍の勢至菩薩像と観音菩薩像の二尊はともに立像で、それぞれ膝を曲げた前傾姿勢をとっていて、阿弥陀仏の来迎の姿を示しています。勢至菩薩像は合掌し、観音菩薩像はお腹の前で手を上に向けていて蓮座を持っていたものと思われますが失われています。制作時期は江戸時代と推定されます。

大正院の不動剣（だいしょういん ふどうけん）　1口

本庄市指定有形文化財・工芸品
所在地　本庄
時　代　近世

大正院の不動堂が建立されたときに奉納された剣と伝えられています。剣の形象をとっていて、束は三鈷杵様に造られています。

本庄宿に居住して作刀した刀鍛冶の長谷部若狭守国治の作です。銘文は表側に「長谷部若狭守国治作」とあり、裏側に「正目剣、慶応三年二月吉日」と刻まれています。

長さ 50.2cm。

※慶応３年＝ 1867 年

下浅見鷺山古墳出土品（しもあざみさぎやまこふんしゅつどひん）　1括

本庄市指定有形文化財・考古資料
所在地　中央
時　代　古代（古墳時代）

下浅見鷺山古墳から出土した土器で、壺や碗などの器種があります。古墳は全長約 60 mの規模をもつ古墳時代前期の前方後方墳で、これらの土器は昭和 60 年に、埼玉県県史編さん室が実施した確認調査で出土しました。壺、碗ともに製作段階で底部に円形の孔が開けられ、全体を赤色に塗彩されています。壺には口縁部にも２孔１対計 12 箇所の円孔が見られます。このような特徴から、これらの土器は実用の容器ではなく、古墳に供献するための儀礼用の土器と考えられています。

小島前の山古墳出土盾持人物埴輪 3体
（おじままえ やまこふん たてもちじんぶつはにわ）

本庄市指定有形文化財・考古資料
所在地　中央
時　代　古代（古墳時代）

小島前の山古墳は直径約24m、高さ4ｍ以上の規模をもつ円墳で、盾持人物埴輪は横穴式石室入り口の左右に、顔を古墳の外側に向けて配置された状態で検出されました。本庄市マスコット「はにぽん」のモデルとなった写真中央の一体は、大きく口角を上げて笑う口と三日月形の眼孔、左右に張り出した耳、高い鷲鼻、大きくしゃくれた顎など他には例を見ない特異な容貌が特徴です。基部から頭頂部までの高さが115㎝あり、盾持人物埴輪としては最も大型の部類に属します。盾をもって横穴式石室の入り口に立ち、古墳に埋葬された人物を守護する役割を担っていたのでしょう。帰属年代は一緒に出土した円筒埴輪や土器の型式などから6世紀後半と推定されます。

御手長山古墳出土人物埴輪 1体
（おてながやまこふん じんぶつはにわ）

本庄市指定有形文化財・考古資料
所在地　中央
時　代　古代（古墳時代）

小島御手長山古墳は直径約49ｍ、高さ6.5ｍの規模を有する6世紀後半の円墳でした。人物埴輪は昭和40年頃墳丘から発見された男子の半身像で、美豆良（みずら）を結った表現は見られませんが、玉を連ねた頸飾と耳環を着け、腰には鎌を差しています。鎌を差す人物は馬形埴輪とともに出土する例が多いことから、この埴輪も馬飼いの人物を表現していると推測されます。

寺山廃寺の風鐸（てらやまはいじふうたく）　1点

本庄市指定有形文化財・考古資料
所在地　中央
時　代　古代

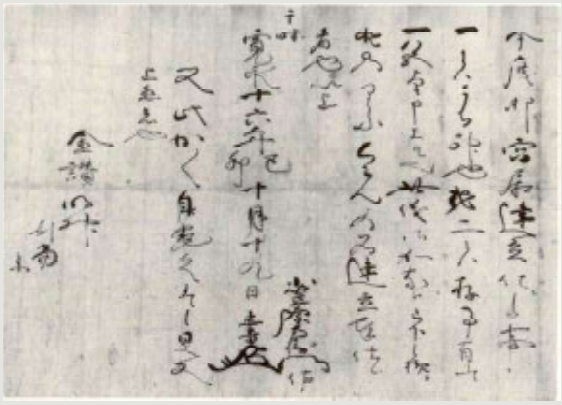
鋳鉄製の風鐸で、高さ 21.7cm、口径 14.9cmの大きさがあります。下端部が 4 単位の花弁状になっていて、表面には突線で文様を鋳出しています。類例に乏しく、東国で製作されたものと推測されます。出土地点は斜面を造成した平場となっており、平安時代の瓦塔の破片なども採集されていることから、かつてこの地に古代寺院が所在し、この風鐸はその堂宇に垂下されていたものと考えられます。

小笠原忠貴建立祈願文（おがさわらただたかこんりゅうきがんぶん）　1点

本庄市指定有形文化財・古文書
所在地　千代田
時　代　近世

下総国関宿 (現千葉県野田市) 城主小笠原忠貴 (本庄城主小笠原信嶺の孫で、小笠原信之の子) が寛永 16 年 (1639) に本庄宿の鎮守金鑽神社の社殿を寄進した時の祈願文です。

小笠原忠貴 (後に政信に改名) はすでに本庄を離れて下総国関宿に移っていましたが、父と祖父の眠る本庄の地に深い愛情があったものと思われます。



高山彦九郎墓前日記（たかやまひこくろうぼぜんにっき）　1点

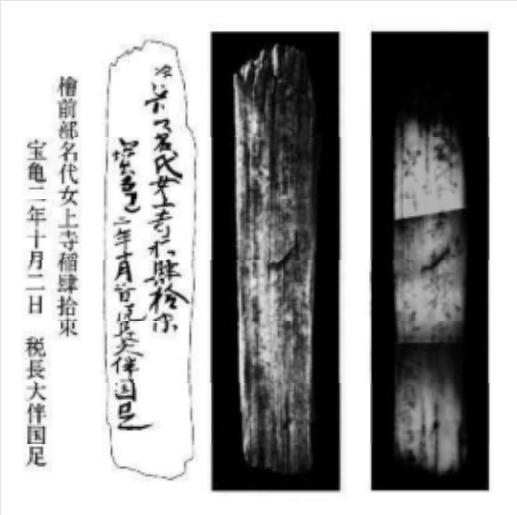
本庄市指定有形文化財・古文書
所在地　銀座
時　代　近世

高山彦九郎は江戸時代後期の勤王思想家で、その思想は幕末期の吉田松陰らの勤王の志士達に影響を与えたといいます。彦九郎は上州新田郡細谷村 (現群馬県太田市) 出身で、全国各地を遊歴し勤王論を説いたといいます。後に幕府から危険視され捕縛の後自刃しています。彦九郎は多くの日記を残していて、市内にも１冊が伝わっています。

この日記は天明７年 (1787) の日記で、前年になくなった祖母りん刀自の喪に服した様子など記録されています。横半帳で表紙ともに 74 枚。

寶龜二年銘木簡（ほうき もっかん）　1点

本庄市指定有形文化財・歴史資料
所在地　中央
時　代　古代



児玉町飯倉所在の山崎上ノ南遺跡で出土した木簡で、長さ 18.3 cm、幅 3.6 cmのヒノキの板材が使われています。「檜前部名代女（ひのくまべのなしろめ）という女性が、寺の稲四十束を返済したことを役所の税長大伴国足（おおともくにたり）が寶龜２年（771）10 月２日に確認しました」という内容で、春に種籾を借り、秋に利子を付けて返す「出挙（すいこ）」の実態が記された貴重な資料です。奈良時代の年号が記された木簡としても県内唯一のものです。

開善寺の御朱印箱　1点

かいぜんじ　ごしゅいんばこ

本庄市指定有形文化財・歴史資料
所在地　中央
時　代　近世

開善寺は本庄城主小笠原信嶺が開いた小笠原氏の菩提寺で、小笠原氏が本庄城から古河城へ、さらに関宿城へ移封した後も、本庄宿で格式の高い寺院でした。

この箱は、慶安２年(1649)に３代将軍の徳川家光より15石の御朱印を賜ったときから歴代の将軍家より賜った朱印状を納めた漆塗りの被せ蓋作りの箱です。

この御朱印箱は、外箱と内箱の二重入れ子式になっています。

開善寺境内絵図　1枚

かいぜんじけいだいえず

本庄市指定有形文化財・歴史資料
所在地　中央
時　代　近世

開善寺は本庄城主小笠原信嶺が開いた臨済宗寺院で、幕府より15石の御朱印を得ていました。

この境内図は慶応元年(1865)における開善寺の寺域を明瞭に示していて、寺域は広大で、現在の寺域の５倍近くありました。図のほぼ中央に本庄城主小笠原信嶺夫妻の墓が描かれ、本堂・庫裏・禅蔵・土蔵・鐘楼、それに勢至堂・愛宕神社が描かれています。寸法は縦169cm、横156cmあります。

かずのみやせいぼかんぎょういんはいりょうひん
和宮生母観行院拝領品　1 括

本庄市指定有形文化財・歴史資料
所在地　銀座
時　代　近世

幕末期の文久元年 (1861) に、皇女和宮が将軍徳川家茂との婚儀のため中山道を下向し、本庄宿の田村本陣に宿泊しました。この時、行列に随行した和宮の生母観行院及び家老は本庄宿の日向家に宿泊し、この時に同家が拝領した品々が伝えられています。

和宮生母観行院よりの拝領品には、緋綾縮緬・煙草入れ・扇・京人形・御杯・かわらけなどがあります。家老よりの拝領品には短冊・墨画があります。

もてぎこへいおうしょうとくひ
茂木小平翁頌徳碑　1 基

本庄市指定有形文化財・歴史資料
所在地　千代田
時　代　近代

茂木小平は天保 7 年 (1836) に武蔵国児玉郡上仁手村に生まれました。生家は蚕種業を生業としていました。小平は青年期に江戸へ出て漢学を修めました。その後、上仁手村の名主に就任し、明治維新後は戸長を務めました。また利根川上組蚕種製造組合頭取を務め、仁手村長を務めるなど行政・産業面で大いに活躍しました。さらに郡会議員や県会議員も務め、引退後は近隣の師弟を集めて漢学や習字を教えました。

大正 13 年 (1924)、89 歳にて没し、門弟達は師恩に報いるため頌徳碑を建立しました。

コラム①

本庄市の山車と屋台

現在、本庄市には本庄まつりの山車10台とこだま秋祭りの屋台１台と山車３台、宮内地区の雨乞い屋台１台の合計15台の曳山が存在します。この内、本庄まつりの山車８台にこだま秋祭りの屋台と山車の４台が市の有形民俗文化財に指定されています。

本庄まつりの山車８台の特徴はいずれも江戸型の人形山車であることです。古いものは明治５年(1872)に製造され、以後大正時代までに造られました。いずれも高々と人形座をせり上げて、その上に人形を乗せています。人形は現在、日本武尊・武内宿祢・神功皇后・桃太郎・加藤清正・神武天皇・石橋・素盞嗚尊とバラエティに富んでいます。

こだま秋まつりの新町の屋台は、秩父型屋台の流れをくむ大型で豪華な屋台です。３台の山車はいずれも人形山車ですが、仲町の山車は人形座の昇降機構を持つ江戸型山車と秩父型屋台の特徴を取り入れたもので、他の２台の山車は秩父型屋台の特徴を取り入れ屋根上に人形座を設けた児玉型山車と呼べるものです。

本庄宮本町（ほんじょうみやもとちょう）の山車（だし）　１台

本庄市指定民俗文化財・有形民俗文化財
所在地　千代田
時　代　近代

宮本町の山車は明治15年(1882)に新調された江戸型人形山車です。同年に東京の原舟月より出された仕様書や、山車の部品を納めた木箱の墨書、山車及び人形製作に関する書簡などが残されており、山車の製作購入の様子がわかって大変貴重なものです。

山車は四輪固定式で、囃子座の屋根は当初より唐破風屋根となっていました。車台とその上の構造物との間が「チャンチキ」と呼ばれる回転台で接続される特徴を持っています。

宮本町の人形は「日本武尊」で、人形座は二重枠組のせり出し式となっています。

本庄泉町の山車（ほんじょういずみちょうだし）　1台

本庄市指定民俗文化財・有形民俗文化財
所在地　千代田
時　代　近代

泉町の山車は、明治28年(1895)に東京浅草の横山友治郎より新調したものです。山車新調時の記録が残されていないためその詳細は不明ですが、人形の頭を納めた箱等に墨書が見られ、新調時の様子の一部が窺えます。

山車は四輪式ですが、前輪馬車式となっています。泉町の山車でもっとも特徴的なものは、囃子座に破風屋根をもたず欄間式となっていることです。この形式は江戸型人形山車と同じ特徴で、江戸時代から続くこの山車の形式を今に伝えています。また三重高欄の正面中央を下げて、その先端を蕨手としていることも他町内の山車と異なる点といえます。

人形は「武内宿祢」を乗せています。

本庄上町の山車（ほんじょうかみまちだし）　1台

本庄市指定民俗文化財・有形民俗文化財
所在地　中央
時　代　近代

上町の山車は、明治35年(1902)に、泉町の山車と同様に東京浅草の横山友治郎より新調したものです。

上町には山車製作依頼時の各種資料と、資金調達のための寄付金関係書類が残されていて、山車購入時の様子が判明しています。

山車は四輪式で前輪馬車式となっています。囃子座は唐破風屋根式で当初から備えられていたと思われます。人形は「神功皇后」で、人形座は二重枠組のせり出し式となっています。

本庄照若町の山車（ほんじょうてるわかちょうだし）　1台

本庄市指定民俗文化財・有形民俗文化財
所在地　若泉
時　代　近代

照若町の山車の新調については残された史料が少ないため不明な点も多いのですが、明治33年(1900)に東京浅草の浪花屋庄田七郎兵衛によって製作されたものです。

山車は四輪式で、当初は固定式の四つ車でしたが、昭和12年(1937)の改造で前輪馬車式に替わっています。囃子座も新調時は欄間式であったと思われ、昭和12年の大改造の時に唐破風屋根式に改めたと思われます。この時の修繕設計図が残されています。

人形は「桃太郎」を乗せています。大正11年の古写真に見る人形は別なものにみえるので、当初は別の桃太郎人形を乗せていたのかも知れません。なお、桃太郎人形は地元本庄の米福が製作したとの話もあります。

本庄七軒町の山車（ほんじょうしちけんちょうだし）　1台

本庄市指定民俗文化財・有形民俗文化財
所在地　銀座
時　代　近代

七軒町の山車の製作は大正12年(1923)より地元の大工の手により始められ、翌13年には完成しました。

山車は四輪式で前輪馬車式となっています。囃子座は唐破風屋根式ですが、製作当初は欄間式と思われ、昭和35年の改修の際に唐破風屋根式に改めました。

人形は現在「加藤清正」を乗せています。この人形は昭和8年(1933)に、地元の人形師米福が製作したものです。七軒町の山車は加藤清正人形を新調する前は、米福から人形を借りて乗せていたといわれます。古写真に拠れば大正14年(1925)の時は「八咫鏡」、昭和3年(1928)の時は「太平楽」を乗せています。なお、昭和35年(1960)の改修で二重高欄を三重に改めています。人形座は二重枠組のせり出し式となっています。

本庄仲町の山車（ほんじょうなかまち だし）　1台

本庄市指定民俗文化財・有形民俗文化財
所在地　中央
時　代　近代

仲町の山車は明治５年(1872)に新調された本庄で最も古い山車です。関連史料が残されていて、それによれば東京浅草の原舟月が製作した山車です。当初は四輪式で、囃子座も高欄式であったと推定されます。その後、数度の改修が施されましたが、明治24年(1891)の修理の際に、高欄の修理を行い、新たに神武天皇の人形を新調しました。この時に最初の人形龍女は原舟月が下取りしました。その後、昭和11年(1936)にも大改修が行われ、二重幕の新調と囃子座を唐破風屋根式とし、彫刻も一新しています。

人形座は二重枠組のせり出し式となっています。

本庄本町の山車（ほんじょうもとまち だし）　1台

本庄市指定民俗文化財・有形民俗文化財
所在地　本庄
時　代　近代

本町の山車は関係史料が少なく不明瞭ですが、明治28年(1895)に日清戦争従軍兵士の凱旋記念に製作されたと推定されます。製作したのは東京浅草の浪花屋庄田七郎兵衛です。山車新調時には人形は「翁」を乗せていたようです。

山車は四輪式で前輪馬車式となっています。囃子座は唐破風屋根式です。昭和９年(1934)に大改修が行われ、破風、鬼板、腰板、昇龍、降龍に手が加えられています。

現在、人形は「石橋」ですが、これは昭和３年(1928)に新調されたもので、製作は山車と同じく東京浅草の浪花屋庄田七郎兵衛です。

なお、人形座は他町と同様に二重枠組のせり出し式となっています。

本庄台町の山車（ほんじょうだいまち だし）　1台

本庄市指定民俗文化財・有形民俗文化財
所在地　本庄
時　代　近代

台町の山車は、山車に付属する木札の銘文から、明治18年(1885)に東京浅草の浪花屋庄田七郎兵衛が製作したことがわかります。

山車は製作年代が比較的古いことから江戸型人形山車の特徴を強く引いていたものと思われ、新調時は車輪は四輪固定式で、囃子座も欄間式であったものと思われます。昭和9年(1934)の改修で本町の山車改修時に出た部品を譲り受けて再利用し、囃子座を欄間式から唐破風屋根式としました。さらに昇龍、降龍などの彫刻を増やしました。昭和24年(1949)の改修では足回りに手を加え、固定式から前輪馬車式に改めています。

人形は「素盞嗚尊」で、人形座は他町と同様に二重枠組のせり出し式となっています。

本庄本町の神輿（ほんじょうもとまち みこし）　1台

本庄市指定民俗文化財・有形民俗文化財
所在地　本庄
時　代　近世

江戸時代の明和4年(1767)に製作され、翌年より市神祭礼日に神輿渡御が行われました。

神輿の内部に墨書が見られ、「明和四亥年十一月」、「細工人大坂北御堂筋、宮屋九郎兵衛」と書かれています。

明治12年(1879)に修理が行われましたが、瓔珞（ようらく）も残り、旧状をよく保っています。昭和5年(1930)に新しい神輿が製作され、以後、新神輿が担がれるようになり、この神輿は大切に保管され、祇園祭の時には御仮舎に飾られています。

台町の獅子舞（だいまち　ししまい）

埼玉県指定民俗文化財・無形民俗文化財
所在地　本庄
時　代　近世～現代

寛文３年 (1663) に台町八坂神社の氏子有志によって奉納されたのが始まりといわれています。獅子舞はこの時から現在に至るまで毎年休むことなく奉納され、、時には干ばつ時の雨乞いに霊験あらたかで、雨乞い獅子と崇められてきました。

台町の獅子舞の獅子頭は、最も古いものが寛文８年 (1668)、二代目が文政 11 年 (1828)、三代目が昭和 11 年 (1936) に製作され、現在使用しているものは昭和 60 年 (1985) に製作されたものです。

金鑽神楽本庄組（かなさなかぐらほんじょうぐみ）

本庄市指定民俗文化財・無形民俗文化財
所在地　千代田
時　代　近世～現代

江戸時代より続く太々（だいだい）神楽で、金鑽神楽十三組の一つです。

深谷宿の鼠八幡神社から岡部 (深谷市) の森田組を経て伝承されました。伝承された当時は免許制で執り行われており、文政８年 (1825) の免許状が残されています。

本庄城址（ほんじょうじょうし）

本庄市指定文化財（記念物）・史跡
所在地　本庄
時　代　中世

本庄城は戦国時代の弘治２年 (1556) に武蔵武士児玉党の後裔本庄実忠が築城したといわれています。

本庄城に拠った本庄氏は関東管領山内上杉氏の配下でしたが、山内上杉氏の没落に伴い小田原北条氏に属しました。

天正 18 年 (1590) に豊臣秀吉の小田原北条氏攻めが行われ、その際に本庄城も落城しました。翌年、徳川家康の関東入国に伴い、家康は有力家臣を関東各地に配置しました。本庄城には小笠原信嶺を１万石で配置しました。本庄藩の成立です。その後、慶長 17 年 (1612) に、信嶺の後を継いだ小笠原信之の時に下総国古河に転封となり、以後、本庄藩は廃藩となり、本庄城も廃城となりました。

コラム②

児玉党と本庄氏

本庄城を築いた本庄実忠は鎌倉時代初期に遡る武蔵武士児玉党の一族の後裔と推定されます。平安時代末期に登場した児玉党一族は、最初は児玉郡阿久原牧 (神川町) の別当として力を蓄え、やがて武蔵国北部の平野部に進出して、児玉郡各地に一族を分派していきました。また比企郡の一部と入間郡西部、秩父郡北部から上野国西部にまで児玉党一族は広がっています。

この中でも児玉姓から庄姓を称した庄氏一族は九郷用水沿線の村落に勢力を広げ、郡内の蛭川・今井・入浅見・下浅見・四方田・牧西・本庄 (北堀・栗崎一体を含む) 地区を勢力下においていました。鎌倉時代を通じて幾度かの内乱に参戦し、活躍した庄氏一族は北へ、西へと新たな所領や地頭職を獲得し、次第に移住していく一族が続出しました。庄氏の主力は備中国 (岡山県) の草壁庄や小坂庄などを獲得して早い段階に移住しています。移住した一族はこの後、備中・美作・讃岐・近江・伊勢などの関西方面で活躍します。しかしながら地元に残った一族もあり、武蔵国豊島郡で活躍した庄氏もあり、関東で活躍しますが、庄氏から別れた本庄氏の一派はその後も永く児玉郡内にとどまり、一時期は、西本庄氏などと称した者もいたようです。

戦国時代に山内上杉氏に属した本庄実忠も児玉党本庄氏の子孫であったと思われます。

おがさわらのぶみねふさい　はか
小笠原信嶺夫妻の墓

本庄市指定文化財（記念物）・史跡
所在地　中央
時　代　近世

小笠原信嶺は信州小笠原氏の一族で、天正 18 年 (1590) に小田原北条氏が滅亡して関東に徳川家康が転封されると、家康より本庄城主を命じられて 1 万石で入城しました。

信嶺は慶長 3 年 (1598) 2 月 19 日に没しますが、信嶺が生前に開基した開善寺に葬られました。墓地は開善寺の南側墓地内にあって、夫妻の墓が並んで建っています。信嶺の法名は開善寺殿徹州道也大居士で、墓は全高 180㎝の宝篋印塔です。2 基中左側の塔が信嶺の墓です。宝篋印塔の形状も戦国末期から近世初頭頃に流行した形状をもっています。

おがさわらのぶゆき　はか
小笠原信之の墓

本庄市指定文化財（記念物）・史跡
所在地　中央
時　代　近世

小笠原左衛門佐信之は元亀元年 (1570) に徳川四天王の一人酒井忠次の三男として生まれました。少年の頃より徳川家康に仕え、天正 16 年 (1588) に小笠原信嶺の娘を娶って信嶺の養嗣子となりました。慶長 3 年 (1598) には家督を継いで本庄城主となります。信之は徳川秀忠に従って上杉景勝の討伐に参加し、慶長 5 年 (1600) の上田城攻めにも参加しました。

また実父酒井忠次のために本庄宿に円心寺を建立しました。

慶長 17 年 (1612) には、幕命により下総国古河への 1 万石加増の上転封となり本庄城を後にしました。同 19 年に古河で死去しましたが、本庄宿の開善寺に葬られました。享年 45 歳でした。墓は開善寺の墓地中央北側にあり、墓石は宝篋印塔ですが、様式は戦国時代の特徴をよく残しています。塔の基礎には銘文は見られず、近世初期に起きた本庄大火の影響を受けたのか全体的に火災に遭った痕跡が見られます。

普寛上人の墓（ふかんしょうにんのはか）

本庄市指定文化財（記念物）・史跡
所在地　中央
時　代　近世

普寛上人は享保 16 年 (1731) に武蔵国秩父郡大瀧村に生まれました。34 歳の時に天台宗の修験者となり、神道御嶽経を創設します。上人は行者となり各地の登山道を切り開きましたが、中でも寛政 4 年 (1792) に開いた木曽御嶽山の王滝口の開設は有名です。

普寛上人は享和元年 (1801) に江戸より故郷の秩父へ帰る途中本庄宿の米屋弥兵衛方で死去しました。71 歳であったといいます。没後、同宿の寺院安養院の墓地の北側の一角に埋葬されました。

小倉家の墓碑群（おぐらけのぼひぐん）

本庄市指定文化財（記念物）・史跡
所在地　中央
時　代　近世

安養院墓地内にある小倉家墓地には、江戸時代の著名な文人墨客達の遺墨を刻んだ墓石が多く所在します。

小倉家は江戸時代末期にこの地で料亭紅葉屋を営みました。紅葉屋は広大な敷地を持ち、邸宅は小倉山房と呼ばれました。山房亭主の小倉紅於は多くの文人達との交流を持ちました。その文人達の遺墨を後世に残すために、江戸の石工を召し抱えて優れた作品を今に伝えています。

金鑽神社のクスノキ　１本
かなさなじんじゃ

埼玉県指定文化財（記念物）・天然記念物
所在地　千代田

本庄城主小笠原信嶺の孫忠貴（後に政信に改名）が、寛永 16 年 (1639) に金鑽神社社殿を寄進建立した時に献木したものと伝えられています。

関東でも稀なクスノキの古木で、樹勢は今なお旺盛で、南側から東側にかけて大きく枝を繁茂させています。

目通り周囲約 6 m、樹高約 30 m

城山稲荷神社のケヤキ　１本
しろやまいなりじんじゃ

埼玉県指定文化財（記念物）・天然記念物
所在地　本庄

本庄実忠が弘治 2 年 (1556) に本庄城を築城した際に、献木したものと伝えられます。樹齢はおよそ 460 年と推定されます。関東でも有数のケヤキの古木です。

目通り周囲約 7 m、樹高約 24 m。

ほんじょうかなさなじんじゃ
本庄金鑽神社のカヤ　１本

本庄市指定文化財（記念物）・天然記念物
所在地　千代田

本庄城主小笠原忠貴 (政信) が、金鑽神社の社殿を寄付建立した時に植樹したと伝えられています。

目通り周囲約 3.5 m、樹高約 25 m。

しろやまいなりじんじゃ
城山稲荷神社のヤブツバキ　１本

本庄市指定文化財（記念物）・天然記念物
所在地　本庄

本庄実忠が弘治２年 (1556) に本庄城を築城した際に、西本庄の地より椿稲荷を現在地に移したことに因んで、植えられたと伝えられています。

目通り周囲約 1.2 m、樹高約 8.5 m

なかまちあたごじんじゃ
仲町愛宕神社のケヤキ　２本

本庄市指定文化財（記念物）・天然記念物
所在地　中央

仲町の愛宕神社は古墳上に祀られており、社殿に至る石段の左手に御神木として所在しています。

ケヤキは根元から南北に二本立ちとなっており、その樹勢は旺盛です。

目通り周囲約 4.5 m、樹高約 23 m（北側）。

旧本庄商業銀行煉瓦倉庫 1棟
きゅうほんじょうしょうぎょうぎんこうれんがそうこ

国登録有形文化財
所在地　銀座
時　代　近代

旧本庄商業銀行煉瓦倉庫は、明治に入り本庄町が繭市場として賑わうと、それに呼応して金融機関の必要性が高まり明治27年(1894)に本庄商業銀行が設立されました。この商業銀行は融資の際に大量の繭を担保として取り扱うため、それを保管する大型の頑丈な倉庫が必要となり、明治29年(1896)に銀行に隣接して煉瓦倉庫が建設されました。この煉瓦倉庫は赤煉瓦造り寄棟桟瓦葺き二階建てで、小屋組は洋式トラス構造でした。請負業者は清水店(現清水建設)で、設計者は岡本甃太郎と清水釘吉でした。本倉庫は埼玉県では類例の少ない煉瓦造りの大型建造物として、さらにかつての本庄繭市場の繁栄を今に伝える遺構としても極めて重要な建造物です。

旧本庄郵便局（本庄仲町郵便局）1棟
きゅうほんじょうゆうびんきょく

国登録有形文化財
所在地　中央
時　代　近代

日本の近代郵便制度が明治4年(1871)より発足し、翌5年の創業時には本庄町にも郵便局が設置されました。本庄では諸井家(東諸井)の当主諸井泉衛が初代局長に任命されました。当初は郵便局舎の建設が間に合わず、局長の自宅が仮りの局舎として利用されました。新局舎は明治23年(1890)に完成しています。この時には局長は二代目の諸井恒平に代わっています。その後、昭和に入ると郵便取扱量が増大して局舎が手狭となり、新たに新局舎を建設することになり、昭和9年(1934)に旧局舎跡に現在の仲町郵便局の建物が建設されました。設計は石間氏、施工は今村氏、棟梁は地元の大工尾高定吉でした。昭和35年(1960)に本庄郵便局から本庄仲町郵便局に改称されました。

寺坂橋（てらさかばし）　1基

国登録有形文化財
所在地　中央
時　代　近代

寺坂橋は旧伊勢崎道の元小山川に架かる1スパンの石造アーチ橋です。

規模は橋長7.58ｍ、幅員３ｍで、明治22年(1889) ４月に竣工しました。現状では石製の手摺りは失われ、金属製の手摺りに替わっています。なお、石製の親柱については橋の袂に寄せられて現存しています。

寺坂橋は近代的な切石を用いたアーチ橋で、現在現役の石造アーチ橋としては県内最古の橋となっています。

賀美橋（かみばし）　1基

国登録有形文化財
所在地　若泉
時　代　近代

賀美橋は伊勢崎新道の開削に伴って元小山川に架けられた１スパンのＲＣ桁橋です。大正15年(1926) 11月に竣工しました。

橋の規模は、橋長6.28ｍ、幅員(車道部)8.65ｍで装飾の優れた橋です。

賀美橋の大きな特徴は、竣工当時は家型の造形を持つ親柱の上にガラス製の橋灯を設置したことです。現在は復元された橋灯が設置されています。また高欄部分の下部に半円形の白いタイル貼りの装飾がなされるなど特徴の多い橋です。

竣工当時の賀美橋

本庄地域北部の文化財

仁手諏訪神社の獅子舞（本庄市指定文化財）

本庄地域北部マップ

本庄地域北部の歴史

本庄地域北部は利根川及び烏川の沿岸地域で、平坦な地域ですが、かつては度々水害に見舞われていました。江戸時代には北より三友河岸・山王堂河岸・一本木河岸などが賑わい利根川水運の盛んな地域でした。明治以降は中山道に沿って日本鉄道（現高崎線）が敷設され、鉄道輸送にその座を奪われました。この地域は低地で平坦ですが、水利の便は悪く、米作には向かない地域でした。しかしながら桑の生育には適しており、古くより養蚕が行われ、江戸時代後期には蚕種の生産が広く行われています。特に江戸時代末期、日本の開国とヨーロッパの蚕種が病原菌に冒されると、この地域の蚕種は盛んに輸出され、蚕種業者は大量に蚕種を製造しました。現在は養蚕や蚕種製造は行われなくなりましたが、高窓を乗せた大型の養蚕家屋を今でも見ることが出来ます。また、現在は野菜の生産が盛んです。

宮戸八幡大神社格天井絵（みやどはちまんだいじんじゃごうてんじょうえ）

本庄市指定有形文化財・絵画
所在地　宮戸
時　代　近世

宮戸八幡大神社の拝殿の格天井に檜板 57cm四方の花鳥画が 28 面あります。

この花鳥画の制作時期あるいは奉納時期は、銘文によれば嘉永６年 (1853) ２月となっています。作者は金井烏州・金井研香・金井杏雨が各４面ずつ、柿沼山岳１面、角田岱岳７面、角田章岳・角田雄岳各２面で、外に作者不明のもの４面となっています。

木造阿弥陀如来立像（もくぞうあみだにょらいりつぞう）　１躯

本庄市指定有形文化財・彫刻
所在地　牧西
時　代　中世

この阿弥陀如来立像は、中山道に沿った旧家の仏間に安置されています。立像は寄木造りで、来迎印を結んでいます。眼・白毫・肉髻珠には水晶を嵌め込んでおり、極めて良い保存状態になっています。

なお舟形の光背は後補と思われ、江戸時代の修理を受けています。

この阿弥陀如来像は、厨子に納められ、厨子の扉左右内側には雲に乗った勢至菩薩と観音菩薩をそれぞれ金箔で描き、阿弥陀三尊の来迎の姿を表現しています。像高は 50cmで、鎌倉時代の作と推定されます。

小和瀬薬師堂自然石塔婆（こわせやくしどうしぜんせきとうば）　１基

本庄市指定有形文化財・歴史資料
所在地　小和瀬
時　代　中世

この塔婆は、円柱状の自然石の三面を調整し、三角柱状に整えられており、その内一面に梵字の種子「ア」(大日如来)を刻み、その下に「宝治丁未八月」(宝治元年＝1247年)と刻んでいます。他の面には「キリーク」(阿弥陀如来)の梵字を刻んでいます。なお、この二つの種子の下には蓮座は刻まれていません。現在、薬師堂の床下に厨子の中に納められています。この地域の石製の塔婆は一般的には板石塔婆(板碑)が多いのですが、稀にこの塔婆のような異質なものも見られます。

正観寺の算額（しょうかんじ　さんがく）　１面

本庄市指定有形文化財・歴史資料
所在地　都島
時　代　近世

享保11年(1726)９月に、都島村の数学者戸塚盛政が同村の観音堂に奉納した算額です。

文久２年(1862)に正観寺の本堂が火災で焼失したため、以後、この観音堂が正観寺の本堂として使われました。そのためこの算額もそのまま正観寺に移されました。

算額とは神社仏閣に数学を志す研究者(和算家)たちが、祈願のため奉納した額です。

この算額は縦31.8cm、横64.3cmの大きさで、県内最古の算額です。

右下、複製の算額

天正十九年宮戸村検地帳（てんしょう　みやどむらけんちちょう）
付金井家文書一括

本庄市指定有形文化財・古文書
所在地　宮戸
時　代　近世

天正 18 年 (1590) 8 月、徳川家康が関東に入り江戸を本拠に定めると、関東各地で検地が実施されました。本庄市内でこの天正検地が確認されるのは宮戸村と牧西村、児玉の松平家清領分の三つだけです。近世初頭期の村の様子を知るための貴重な資料です。縦 32.5cm、横 19.5cm。33 丁。

金鑽神楽宮崎組（かなさなかぐらみやざきぐみ）

本庄市指定民俗文化財・無形民俗文化財
所在地　牧西
時　代　近世～現代

金鑽神楽宮崎組は江戸時代から続く太々神楽で、明治 15 年 (1882) の再編により金鑽神楽宮崎組として上演されています。

宮崎組は牧西の八幡大神社の宮司宮崎氏が歴代の組長としてこの神楽組を統括します。

近年、後継者難のためその活動を一時休止していましたが、平成 27 年より活動を再開して、貴重な民俗芸能を後世に伝えるために組員一同が活動に励んでいます。

仁手諏訪神社の獅子舞（にってすわじんじゃ　ししまい）

本庄市指定民俗文化財・無形民俗文化財
所在地　仁手
時　代　近世～現代

仁手の諏訪神社に伝わる獅子舞の歴史は古く、江戸時代の延宝年間 (1673 ～) に領主の旗本蔭山数馬より村方に下げ渡されたといいます。この獅子舞は日下開山常陸角兵衛流といいます。天明 8 年 (1788) の文書によるとこの角兵衛流の元祖高原喜八が来村して流技を村民に伝授したといいます。

万年寺八幡山古墳（まんねんじはちまんやまこふん）　１基

本庄市指定文化財（記念物）・史跡
所在地　万年寺
時　代　古代（古墳時代）

本庄市から上里町にかけての本庄台地北端部に分布する旭・小島古墳群の一角にある直径約 40 m、高さ３m の円墳で、周囲には幅９～ 11 mの堀がめぐっています。確認調査で板石を組み合わせた石槨が確認されていますが、墳丘の中心部に未確認の埋葬施設が存在する可能性があります。築造年代の詳細は不明ですが、わずかに出土している土師器の型式などから４世紀後半前後と推測されています。

万年寺つつじ山古墳（まんねんじ　やまこふん）付出土品

本庄市指定文化財（記念物）・史跡
所在地　万年寺
時　代　古代（古墳時代）

万年寺八幡山古墳の南東側に近接して所在する一辺 25 mの方墳で、周囲には幅 4.2 ～ 6.3 mの堀がめぐっています。現在の墳丘は、北西側四分の一ほどが残っている状態ですが、調査を行ったところ、墳丘内部から刀子や斧、鎌を象った蛇紋岩製の「石製模造品」12 点が検出されました。古墳の築造時期は石製模造品の型式から古墳時代中期初頭、４世紀後半と推定されています。

小島山の神古墳（おじまやま　かみこふん）　１基

本庄市指定文化財（記念物）・史跡
所在地　小島
時　代　古代（古墳時代）

小島蚕影山古墳と接するようにして立地する直径約 30 m、高さ 4.5 mの円墳で、墳丘は原状をよくとどめています。埋葬施設は横穴式石室と推定され、発掘調査によって墳丘には葺石を備え、埴輪をめぐらせていることが確認されています。埴輪は家や馬のほか、髪を美豆良に結い、頭に被り物を着けた笑顔の男子半身像が出土しています。築造時期は円筒埴輪の型式から６世紀後半と考えられます。

小島蚕影山古墳（おじまこかげやまこふん）　１基

本庄市指定文化財（記念物）・史跡
所在地　小島
時　代　古代（古墳時代）

直径約 18 m、高さ 3.5 mの円墳で、墳丘は西側の一部を除き、原状をよくとどめています。埋葬施設は横穴式石室と推定されますが、未調査のため詳細は判っていません。発掘調査によって、墳丘には葺石を備え、埴輪をめぐらせていることが確認されています。出土する円筒埴輪は隣接する山の神古墳と同型式であることから、築造時期は６世紀後半と考えられます。

沼和田飯玉神社のサイカチ（ぬまわだいいだまじんじゃ）　１本

本庄市指定文化財（記念物）・天然記念物
所在地　沼和田

サイカチは日本固有種で、樹齢数百年の古木も国内に生育するといいます。幹はまっすぐに伸び、幹や枝に鋭い棘があります。

飯玉神社のサイカチは、社殿の西側にあって、木の本体は目通り周囲は約 3.2 mほどあります。サイカチ本体は途中で枯れてしまいましたが、途中から数本の枝が元気に伸びています。

沼和田宝輪寺のカヤ（ぬまわだほうりんじ）　１本

本庄市指定文化財（記念物）・天然記念物
所在地　沼和田

沼和田の宝輪寺本堂西側の墓地境にカヤの古木が生えています。カヤは目通り周囲約５mを計りますが、特に根回り部分は太く、およそ 10 mを越えています。

目通り周囲約５m、樹高約 20 m。

山王堂日枝神社のケヤキ　１本
（さんのうどうひえじんじゃ）

本庄市指定文化財（記念物）・天然記念物
所在地　山王堂

山王堂の日枝神社は利根川堤防側に鎮座しており、神社の創立が江戸時代の慶長年間 (1596 ～) 以前と伝えられています。社殿の裏側の堤防寄りに古木のケヤキがあります。

このケヤキは樹齢は不明ですが、神社の創立期にまで遡るのではないかと思われます。過去に数度に亘る利根川の氾濫に耐えてきた経緯があります。ケヤキは枝瘤が大変多くあり、目通り周囲 5.4 ｍほどあります。

目通り周囲約 5.5 ｍ、樹高約 20 ｍ。

滝岡橋　１基
（たきおかばし）

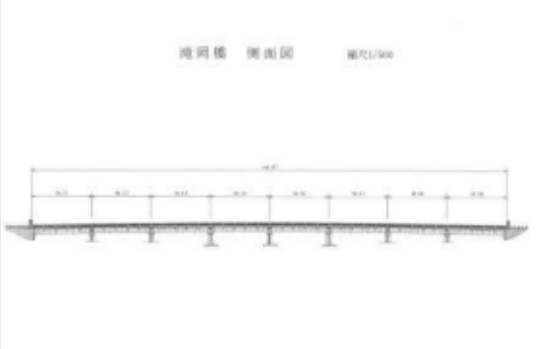
国登録有形文化財
所在地　本庄市堀田・深谷市岡
時　代　近代

滝岡橋は本庄市堀田 (以前は堀田は滝瀬地内に含まれていました) と、深谷市岡との境界を流れる小山川に架けられた橋です。昭和３年 (1928) に旧中山道に架橋されました。

滝岡橋の名前の由来は、両方の地名の一字をとって付けられました。

滝岡橋は、鋼桁橋で橋長 147.47 ｍ、幅員７ｍ、８スパンの直橋です。橋には意匠が凝らされていて、橋台は表面が赤煉瓦のイギリス積み仕上げ、親柱や欄干には花崗岩が用いられています。

特に親柱は直径１ｍの円柱状で、上部には窓が開けられており、かつては電灯が設置されていたものと思われます。



本庄地域南部と児玉地域北部の文化財

鷺山古墳（埼玉県指定文化財）

本庄地域南部と児玉地域北部マップ

本庄地域南部と児玉地域北部の歴史と文化財

この地域は古くより開発された地域で、地域の南側の丘陵上に多くの古墳が造られています。中でも鷺山古墳は 60m 級の前方後方墳で、４世紀半ば以前の築造といわれ、以後、５世紀代には久下塚古墳や金鑽神社古墳などの 60m 級の大型円墳が造られています。その後、この地域には条里が施工され、用水を供給するために九郷用水が掘削されました。平安時代末期には武蔵武士である児玉党一族が児玉郡内に広く分布し、それぞれの地を名字の地としていました。この地域に居た児玉党には庄氏一族と真下氏がおり、庄氏一族はさらなる広がりをみせ、本庄・蛭河・今井・阿佐美・四方田・牧西氏を分派しています。庄氏一族や真下氏は源平合戦に参戦し大いに活躍します。蛭川には庄高家が生け捕ったという平重衡の首塚があり、栗崎の宥勝寺には、一の谷合戦で討ち死にした荘小太郎頼家の供養塔があります。

武正南廬絵画（たけまさなんろかいが）　一括　19 点

本庄市指定有形文化財・絵画
所在地　西富田
時　代　近世

天明６年 (1786) に武正南廬は上州藤岡の峯家に生まれ、名を仙右衛門といいました。後に本庄宿武正家の婿養子となり武正伊右衛門と名乗っています。南廬の雅号は茂恒、画号が南廬です。鈴木南領に絵を学びました。画の他にも書道・歌道も極めています。慶応元年 (1865) に没し、本庄宿の円心寺に葬られました。

作品は南廬晩年のもので、竹林七賢人・曲水図・山水図・恵比寿大黒図・徳川十六将図などかあります。

石造十一面観音坐像（せきぞうじゅういちめんかんのんざぞう）　１躯

本庄市指定有形文化財・彫刻
所在地　西五十子
時　代　中世

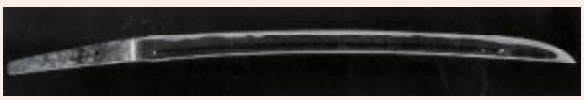
中世に造立された石仏で、市内では類例が少なく、中でも紀年銘のあるものはこれが唯一です。

銘文は、向かって左側に「文明元年己丑七月吉日」、右側に「願主道徳」とあります。道徳は市内の東五十子にある増国寺の住職であった松陰西堂のことといい、松陰は『松陰私語』の作者として知られています。この石仏は光背部上部が一部欠損していますが、法量は 31.3cmあります。材質は砂岩で、左手に花瓶を持ち、右手に数珠を持っています。この砂岩製の石仏は、五十子陣の布陣時期に近い造立であるので、相互の関係を窺わせるものです。

※文明元年＝ 1469 年

長谷部若狭守国治銘脇差（はせべわかさのかみくにはるめいわきざし）　１振

本庄市指定有形文化財・工芸品
所在地　駅南
時　代　近世



幕末から明治期にかけて本庄宿で活躍した刀鍛冶長谷部十七吉国治の作品です。長谷部十七吉は若狭守を名乗り、その作品が市内に残されています。この脇差しは、表に「慶応三年八月吉日」、裏側に「長谷部若狭守国治」の銘があります。慶応３年は西暦の 1867 年。脇差しの長さは 50.9cmあります。

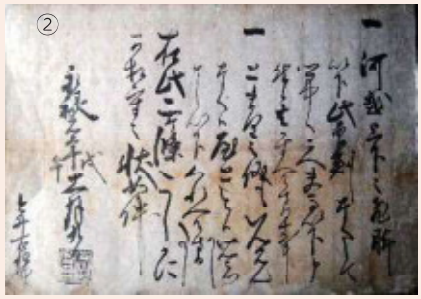
今井鈴木家中世文書　8点

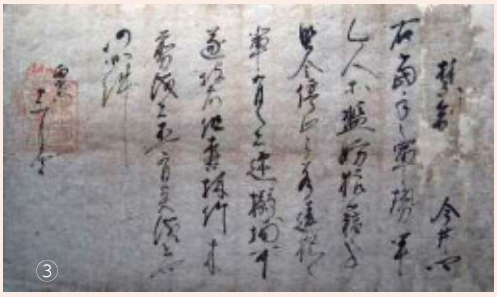
いまいすずきけちゅうせいもんじょ

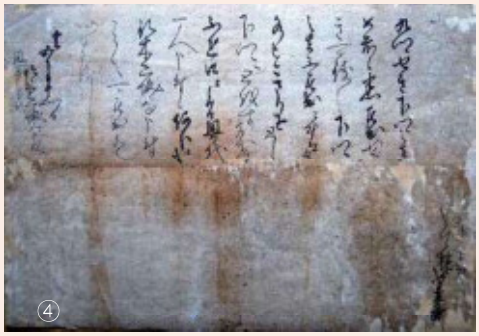
本庄市指定有形文化財・古文書
所在地　今井
時　代　中世

今井の鈴木家には中世文書８点が伝えられています。一部年代が不詳ながら、天文 21 年 (1552) から天正 18 年 (1590) に至る文書群です。市内共和地区を中心とした北武蔵地域の戦国時代の状況を知るために貴重な史料です。①は天文 21 年 (1552) の北条家朱印状で、小田原北条家 (後北条氏) から小幡尾張守に宛てたもので、戦乱を避けていた今井村の百姓の還住を命じたものです。②は永禄元年 (1558) の小幡憲重黒印状で、小幡憲重が今井村の百姓に対して飛脚等の取り決め二箇条を命じたものです。③は永禄９年 (1566) の北条家禁制で、北条家が今井郷での乱暴狼藉を禁止したもの。④は天正 15 年 (1587) の北条氏邦朱印状で、鉢形城主北条氏邦が九郷堰の者達に前々の如く堰普請を行うように命じたものです。⑤は天正 18 年 (1590) の小幡信茂 (か) 判物で、小幡信茂 (推定) が鈴木氏に宛てた文書。ほかに年不詳の小幡憲重黒印状、城賢掟書、信勝判物があります。

①


②


③


④

⑤

西五十子の阿弥陀一尊種子板碑 1基

（にしいかっこ　あみだいっそんしゅじいたび）

本庄市指定有形文化財・歴史資料
所在地　西五十子
時　代　中世

康元２年(1257)銘のある阿弥陀一尊種子板碑。

銘板は「右造立趣者為慈父幽幾成仏也」、「康元二年正月十六日」とあります。

上部の二条線はしっかりと彫られていますが、枠線はありません。法量は高さ87cm、幅36cm、厚さが７cmあります。横幅が広い割に高さがやや低い特徴を持つ形態をしています。

二条線のすぐ下に阿弥陀如来をあらわす梵字のキリークを大きく刻みますが、その下には蓮座は彫っていないようです。

正楽寺の十一面観音 1躯

（しょうらくじ　じゅういちめんかんのん）

本庄市指定民俗文化財・有形民俗文化財
所在地　上真下
時　代　中世

この石造物は、南北朝時代に新田義貞が戦勝祈願を行った時に「ここに祀る十一面観音は、この村を守るみほとけである」といって建立したと伝えています。さらに真下出身の武蔵武士である児玉党の真下一族からも深く信仰され、合戦で討ち死にした一族も一緒に祀られたといいます。

この観音様は、昔上真下の東側で隣村の吉田林へ抜ける橋際にあったものを、正楽寺の住職と村の人たちが相談して、このご本体を境内に移してお堂に納めたといわれています。

なお、この十一面観音は別名子育て観音とも呼ばれて信仰されました。

金鑽神楽杉田組（かなさなかぐらすぎたぐみ）

本庄市指定民俗文化財・無形民俗文化財
所在地　四方田
時　代　近世～現代

江戸時代から続く太々神楽で、金鑽神楽十三組の一つです。明治 15 年 (1882) に行われた金鑽神楽の再編でも当初より参加しています。杉田組の神楽は金鑽組 (神川町) より伝習し伝わったといわれています。旧四方田村の金佐奈神社の宮司杉田家が代々組長としてこの金鑽神楽杉田組を率いています。神楽は金佐奈神社の春の大祭に奉納されます。

今井金鑽神社の獅子舞（いまいかなさなじんじゃのししまい）

本庄市指定民俗文化財・無形民俗文化財
所在地　今井
時　代　近世～現代

享保９年 (1724) に社殿を再建した際に奉納された獅子舞がその起源といわれます。獅子舞は京都よりやってきた神官が村人に伝えたともいわれています。そのため獅子舞には京風の雅楽や蹴鞠の仕草が取り入れられているといいます。明治５年 (1872) には児玉郡内八日市の同行者と一緒に演技に改善を加えて現在に至っています。

吉田林の獅子舞（きたばやしのししまい）

本庄市指定民俗文化財・無形民俗文化財
所在地　吉田林
時　代　近世～現代

吉田林の獅子舞は、文政９年 (1826) 頃に始められたといわれます。当時は疫病の厄払いと干ばつの際の雨乞い祈願のため舞っており、村内各所を回っていました。現在は吉田林の日枝神社の秋の例祭で舞われています。獅子舞の構成は、ぼんぜん１人、花笠２人、舞人３人、笛吹き 10 人となっています。

鷺山古墳（さぎやまこふん）　１基

埼玉県指定文化財（記念物）・史跡
所在地　下浅見
時　代　古代（古墳時代）

生野山丘陵と大久保山丘陵の中間にある小丘陵上に位置する主軸長約 60m の前方後方墳です。以前は円墳と考えられていましたが、昭和 60 年に、埼玉県県史編さん室が確認調査を行った結果、古墳時代前期の前方後方墳であることが判明しました。また、このときの調査で、前方部の平面形が、左右両端を切り落としたような特異な形状を成すことが判明し、他の古墳では例を見ない事例として注目されています。

埋葬施設が未発掘のため、副葬品の様相は明らかではありませんが、墳形が前方後方墳であることや出土した土器の型式から、築造時期は４世紀半ば以前に遡ることが推定され、県内でも最古級の古墳のひとつと考えられています。

宥勝寺裏埴輪窯跡（ゆうしょうじうらはにわかまあと）　付靫形埴輪（ゆぎがたはにわ）４点

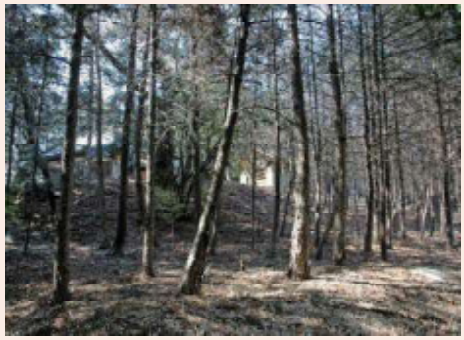
埼玉県指定文化財（記念物）・史跡
所在地　北堀
時　代　古代（古墳時代）

宥勝寺裏埴輪窯跡は大久保山丘陵の北東端部に立地する古墳時代後期の埴輪製作遺跡です。平成 13 年に行われた確認調査で、５基の窯跡が発見されました。窯の構造は丘陵の傾斜を利用した半地下式の登窯で、長さ約７m、幅約 1.5 mほどの規模があります。窯跡の周りからは、矢を収納する武具を造形した靫形埴輪４点が良好な状態で出土したほか、家、馬、人物など各種の形象埴輪片も確認されています。

なお、これまでの調査では検出されていませんが、窯の周囲には、埴輪を造形する工房や乾燥場、燃料の集積場などの施設も存在したことが考えられます。埴輪窯の操業時期は出土した埴輪の型式から、６世紀後半と推定されます。

入浅見金鑽神社古墳 付出土品
いりあざみかなさなじんじゃこふん

本庄市指定文化財（記念物）・史跡
所在地　入浅見
時　代　古代（古墳時代）



生野山丘陵から北東に派生した支丘上に位置する直径約 68 m、高さ 9.7 m の円墳です。墳丘は自然の丘陵を成形した下段と盛土による上段の二段に築成され、上段の斜面には川原石を用いた葺石が施されています。また、周囲には幅 16m 前後の堀がめぐっています。
埋葬施設は明らかになっていませんが、墳丘に緑泥石片岩の板石が露出していることから、箱形石槨であった可能性が指摘されています。
埴輪は墳頂部や墳丘中段の平坦面、堀の外縁にめぐらされていたことが想定されています。円筒埴輪に朝鮮半島の土器製作技術が用いられており、金鑽神社古墳の埴輪製作には、渡来系の技術者も関わっていたことが窺えます。築造年代は古墳時代中期中頃、５世紀前半と考えられます。

二本松遺跡古墳時代集落跡
にほんまついせきこふんじだいしゅうらくあと

本庄市指定文化財（記念物）・史跡
所在地　栄
時　代　古代（古墳時代）

二本松遺跡は、昭和 29 年 12 月、耕作中に土器が発見されたことがきっかけとなって、翌年３月に発掘調査が行われ、さらに引き続いて昭和 33 年までにあわせて６回の調査が実施されました。これらの調査で、古墳時代中期後半、５世紀中頃の竪穴住居跡６棟が検出されています。

二本松遺跡の竪穴住居跡の特徴は、東日本で最も早く竈が導入されていることです。他の多くの地域では、５世紀後半になって普及することから、二本松遺跡の先進性が注目されます。また、古墳時代の集落遺跡の発掘が少なかった時代に、他に先んじて綿密な調査が実施された事例として、学史上も重要な遺跡として知られています。

ひがしとみだかんのんづか
東富田観音塚のマツ　１本

本庄市指定文化財（記念物）・天然記念物
所在地　東富田

本庄城主の小笠原氏が慶長３年 (1598) に赤城山麓からマツを 100 本取り寄せ、城内及び領内各所に植えたといいます。この東富田観音塚のマツは、その最後の生き残った１本であるといわれています。

マツは東西に広く枝を広げ、その長さは 20 mにも及びます。

しょうこたろうよりいえくようとう
荘小太郎頼家供養塔　１基

埼玉県指定文化財（記念物）・旧跡
所在地　栗崎
時　代　中世

荘 (庄) 小太郎頼家は児玉党の嫡流で旗頭といわれた庄太郎家長の長男でした。寿永３年・治承８年 (1184) に起きた一の谷合戦に父とともに参戦しましたが、奮闘の後に討ち死にしています。頼家婦人の妙清禅尼は夫の菩提を弔うために建仁２年 (1202) に宥勝寺を建てたと伝えられています。また寺の背後の大久保山 (浅見山) には児玉党の菩提寺であった西光寺があったともいわれ、この付近一帯は児玉党庄氏一族の一大拠点であったと思われます。

この五輪塔は、形式的には戦国時代の特徴を持っていることから、後年になって頼家の供養塔として造立されたものでしょうか。

平重衡の首塚（たいらのしげひら　くびづか）

本庄市指定文化財（記念物）・史跡
所在地　蛭川
時　代　中世

児玉党の一族庄四郎高家によって一の谷合戦で生け捕られた平清盛の五男の三位中将平重衡の首塚。

平重衡は平家一門の中でも勇将として知られ、捕縛後、鎌倉に送られ源頼朝と面会し、助命も検討されたが、南都焼き討ちを主導したことから、南都僧兵の強い要請によって引き渡され処刑されました。庄四郎高家は重衡の首を譲り受けて、郷里の蛭河郷へ持ち帰り手厚く葬ったと伝えています。

なお、重衡を生け捕ったのは、『平家物語』では庄四郎高家、『武蔵七党系図』では庄太郎家長となっています。

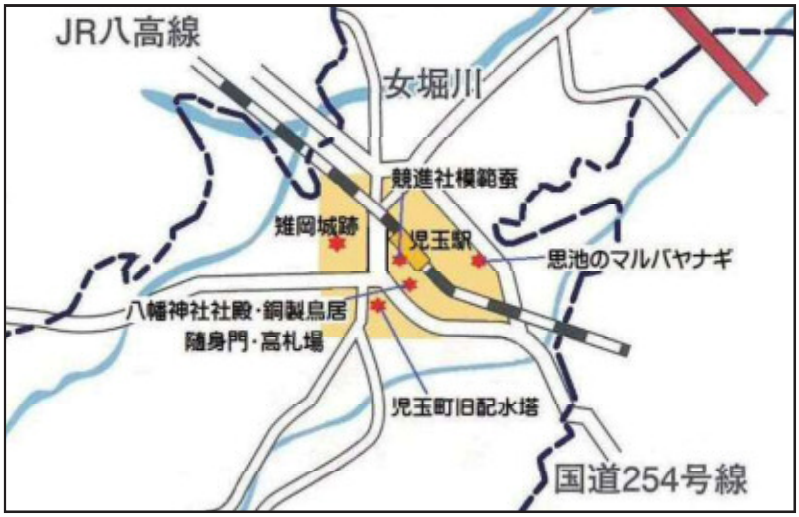
コラム③　児玉党の活躍

児玉党一族は治承寿永の内乱、いわゆる源平合戦でその名を上げ、鎌倉時代に起きた承久の乱を初めとする大規模な内乱でも大いに活躍しています。一般的に児玉党は 56 氏と称されますが、実際に本庄市出身で活躍した一族は庄・四方田・阿佐美・塩谷・児玉・真下氏などでした。源平合戦では庄氏一族の活躍が『平家物語』等の軍記文学作品に載っており、一の谷合戦で庄小太郎頼家が討ち死にしています。市内栗崎の宥勝寺には頼家の供養塔が現存しています。また、庄四郎高家 (庄太郎家長ともいう) が平三位中将重衡を生け捕りにした記述も見られ、後に処刑された重衡の首を郷里蛭河の地に持ち帰って供養したという「重衡首塚」も残っています。さらに一の谷合戦で乗馬の活躍により死をまぬがれた真下太郎の乗馬を供養した下真下の観音堂など源平合戦にまつわる児玉党一族の遺跡が市内に残されています。

文治元年 (1185)、源頼朝と弟の九郎義経の不和にともない京都にあった義経の元に刺客が派遣された際、児玉党一族もこれに関与し、土佐坊昌俊に率いられた児玉党 30 騎 (『玉葉』) が義経邸を襲い、昌俊は逆に討ち取られたといいます。この時に真下太郎と塩谷五郎が昌俊の首 (遺骸) を塩谷郷に持ち帰り手厚く葬ったのが渋谷金王丸の墓として残っています。この他、児玉の玉蓮寺には児玉六郎時国が日蓮上人に帰依し、佐渡へ流される日蓮を自邸に泊め教えを受けた話や、日蓮が足を洗ったという井戸が残されています。

児玉地域市街地の文化財

競進社模範蚕室（埼玉県指定文化財）



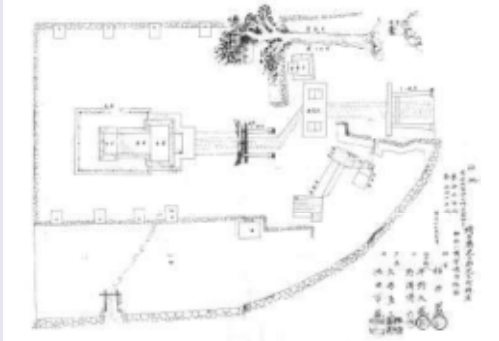
児玉地域市街地マップ

児玉地域市街地の歴史と文化財

児玉地域の市街地には鎌倉街道上道が南北に通り、中世後期になると上杉道も生まれています。交通の要所であるため雉岡城が築かれ、関東管領山内上杉氏の持ち城として機能しました。戦国時代末期には後北条氏の城となりましたが天正 18 年 (1590) に豊臣方の手により落城します。江戸時代に入り雉岡城は廃城となりますが、市街地の整備と鎌倉街道上道とは別に中山道脇往還川越道が整備され、八幡山町と児玉町にそれぞれ六斉市が開かれ賑わいました。信仰の中心であった児玉八幡神社は享保期に壮麗な社殿が建築され、青銅製の鳥居が築造されています。境内には随身門や能楽殿が建設され、文化の中心地でもありました。明治に入ると周辺地域は一大養蚕地域で、生糸の輸出が増大すると養蚕業も盛んとなりました。木村九蔵は養蚕の改良と普及のため、競進社を設立し、児玉町に養蚕伝習所と模範蚕室を建設しました。昭和初期には市街地に近代水道が敷設され、配水塔が建設されています。

はちまんじんじゃしゃでんおよ　どうせいとりい
八幡神社社殿及び銅製鳥居 1棟・1基

埼玉県指定有形文化財・建造物
所在地　児玉
時　代　近世



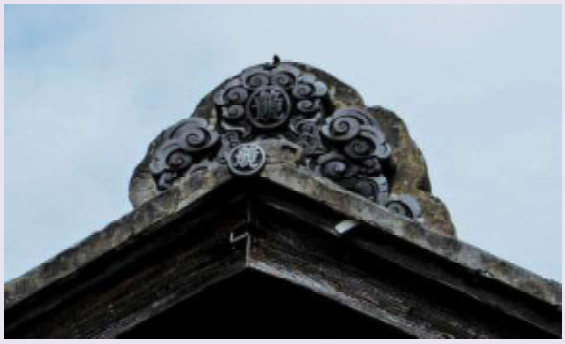
当社の由緒は古く、永承６年(1051)に源義家が父頼義に従って奥州の安倍氏と戦ったときに、この地に斎場を設けて、石清水八幡宮を遙拝して戦勝を祈願し、康平６年(1063)に奥州平定の帰途、当地に立ち寄り八幡宮を勧請したと伝えています。当初は児玉町八幡山雉ヶ岡の地に鎮座しましたが、戦国時代初期に雉岡城が築城されたことに伴って、現在地の児玉町児玉に移転したとも言われます。江戸時代には八幡山町及び児玉町と近郷16ヶ村の総鎮守として信仰され、流鏑馬・神楽・神事能等が行われました。

社殿は本殿・幣殿・拝殿が連結した複合社殿で、地元の有力者であった久米六右衛門が中心となって享保７年(1722)に再建されたもので、棟梁は妻沼の伝兵衛、彫刻は江戸の彫刻師五右衛門と茂右衛門という当代の名手の手になると言われます。拝殿の内部には龍の天井絵(狩野直信画)を初めとして、八幡縁起等の貴重な壁画があります。屋根は当初は柿葺きでしたが、大正13年(1924)の解体修理の時に銅板葺きに改められました。

銅製鳥居は形式が明神形、材質は青銅製で、寸法は高さ558cm、幅645cmです。享保11年(1726)の製造で、制作者は下野国佐野の鋳物師井上治兵衛藤原重治と井上太郎左衛門重友でした。鳥居の左右の柱部分に発起人･願主･世話人や、地元の領主旗本家人の名等を刻んでいます。

競進社模範蚕室（きょうしんしゃもはんさんしつ）　1棟

埼玉県指定有形文化財・建造物
所在地　児玉
時　代　近代



競進社模範蚕室は養蚕の技術の改良に一生を捧げた木村九蔵が、明治27年(1894)に児玉町の競進社養蚕伝習所内に建築したもので、我が国の近代的養蚕業発展にかかわった貴重な遺構です。

木村九蔵は明治10年(1877)に児玉郡新宿村(現神川町)に養蚕改良競進組を結成し、同17年(1884)には組織を改組して競進社とし、児玉町に事務所と伝習所を設置しました。九蔵は「一派温暖育」という火力を用いた新しい養蚕飼育法を考案し、この模範蚕室はその飼育法に適した構造で設計されています。

模範蚕室の構造は、連接した4室の養蚕室のそれぞれに、床下に吸気口をつけ、室内には2基の煉瓦造りの炉を設けています。天井は「小間返し」と呼ばれる簀の子状の天井とし、屋根に設けた4基の高窓(ヤグラ・越屋根)により換気に配慮した構造を持っています。また4つの養蚕室の周囲を廊下がめぐり、西日や直射日光から蚕を守り、さらに作業効率を向上させるなど様々な工夫がなされています。

競進社模範蚕室は蚕を飼育するために最も適した条件で行えるように採光・通風・温度調節・作業効率など多くの工夫が凝らされた蚕室で、養蚕専用蚕室として最も発達した機能を持っていました。そのことからも「模範蚕室」と呼ばれるようになりました。

はちまんじんじゃずいじんもん
八幡神社随身門　1棟

本庄市指定有形文化財・建造物
所在地　児玉
時　代　近世

八幡神社の随身門は、児玉村の有力者の久米六右衛門一族が中心となって周辺の崇敬者達が宝暦６年 (1756) に建立しました。

随身門は神社を守護する役割を持つ門で、門の左右に木像の守護神像 (左大臣・右大臣) を配置しています。

随身門の構造は、八柱３間一戸の入母屋造りで、前面に松平定信揮毫の「白鳩峯」の額が架かっています。また壁面には希代な弓術奉納額や、八幡講相撲の奉納額が飾られています。

はちまんじんじゃのうがくでん
八幡神社能楽殿　1棟

本庄市指定有形文化財・建造物
所在地　児玉
時　代　近世

児玉の八幡神社には宝生流の能楽が伝えられています。神社境内には能楽殿があって、江戸時代の享保年間に能楽が伝えられたといわれています。神社の由緒に寄れば寛保２年 (1742) にこの能楽殿が建立されたといわれます。これまでに天明・大正・平成の３度の修復が行われましたが、平成９年の屋根の改修工事の際に、棟木に天明８年 (1788) の墨書が発見されました。能楽殿は間口３間余、奥行き４間余の規模を持ち、東側奥に橋掛りをもって社務所と接続しています。能舞台は本舞台・後座・地謡座・橋掛りの４つによって構成されますが、かつて鏡の間は神楽殿と一帯として存在しましたが、大正２年 (1913) の社務所建築の際に撤去され、新築した社務所と橋掛りが結合されました。

毎年８月 15 日に能楽が興行されましたが、明治時代に入って次第に廃れ、大正期に宝生流児玉能楽会として一時復活しました。

もくぞうあみださんぞんぞう
木造阿弥陀三尊像　３躯

埼玉県指定有形文化財・彫刻
所在地　児玉
時　代　中世

實相寺は歓喜山専称院と称する浄土宗寺院で、延久２年(1070)の創立と伝える古刹です。

当初は生野山に創建され、戦国時代に雉岡城主夏目豊後守定基の勧めで現在地に移転したともいわれています。

實相寺の本尊の木像阿弥陀如来三尊像は、中尊は阿弥陀如来坐像で、左右の脇侍は向かって左が勢至菩薩立像、右が観音菩薩立像で三尊一具と呼ばれる構成をとっています。三体とも檜材の寄木造りで、玉眼、肉身部は金泥、衣部は古色仕上げとなっています。三尊とも同時に製作されたと考えられます。作風は平安時代初期の様相を強く残していますが、鎌倉時代に流行した作風もみられ、鎌倉時代中期頃の守旧派的な仏師の手による製作と推定されます。

ほうようじもくぞうえんめいじぞうそんざぞう
法養寺木造延命地蔵尊坐像　１躯

本庄市指定有形文化財・彫刻
所在地　児玉
時　代　中世

法養寺の地蔵堂に安置される木像の地蔵菩薩坐像は、寄木造りで、右手に錫杖、左手に宝珠を持っています。玉眼を嵌入し、白毫珠の埋穴を残しています。頭体幹部間面を一材にて造り、後頭部・体部背面・左右側面・両脚部にそれぞれ一材を当てています。

本座像は鎌倉街道上道と上杉道の分岐地点に位置する法養寺の地蔵堂に安置されていて、延命地蔵尊として古くから信仰を集めています。墨書・紀年銘等は認められませんが、その特徴から鎌倉時代の製作と推定されます。

法養寺の鰐口（ほうようじ わにぐち）　１口

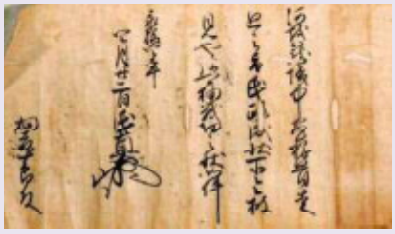
本庄市指定有形文化財・工芸品
所在地　児玉
時　代　中世

この鰐口は昔から知られており、江戸時代に編さんされた地誌の『新編武蔵風土記稿』児玉町の項に収録されています。大きさが直径27cmで、天文２年(1533)の銘があります。児玉地蔵菩薩祈念所に願主の六郎次郎が奉納したもので、その後、洪水のため流出し、土中より発見されて、元文５年(1740)に久米氏が購入し、延享２年(1745)に再び児玉の地蔵堂に奉納したとの追刻があります。

因みにこの鰐口の銘文は、表面に「奉掛鰐口児玉地蔵菩薩祈念所、天文二年癸巳三月廿四日、願主六郎次郎敬白」とあり、裏面に「昔時有小堂、依洪水ノ難此鰐口共ニ失、其後旅人従土中得、当所来テ買之幸哉、自乞求、于時元文五庚申年九月廿三日也、今亦則令寄進也、久米信栄、同　信善、納日延享二乙丑歳四月八日」とあります。

八幡山福田家中世文書（はちまんやまふくだけちゅうせいもんじょ）　３点

本庄市指定有形文化財・古文書
所在地　八幡山
時　代　中世



永禄４年(1561)の北条氏堯感状と北条氏政感状、今川氏真感状の３点があります。

これら３点の文書は、永禄４年に起きた河越籠城関連のもので、川越城主の北条氏堯が、越後上杉勢との籠城戦に功労のあった駿河今川氏よりの援軍畑彦十郎に感状を与え、小田原城主北条氏政への上申を約束したもの。北条氏政は氏堯よりの報告を受けて畑彦十郎の活躍を賞した感状を発給し、駿河今川氏真への伝達を約束しました。今川氏真は氏政よりの報告を受けて、畑彦十郎に感状を発給したものです。

(上より北条氏堯感状・北条氏政感状・今川氏真感状)

實相寺阿弥陀一尊種子板碑　1基

じっそうじ　あ　み　だいっそんしゅじいたび

本庄市指定有形文化財・歴史資料
所在地　児玉
時　代　中世

文永２年 (1265) 銘の阿弥陀一尊種子板碑。

高さが 130cm、幅は上部が 40cmで下部が 44cm、板厚は７cmあります。板碑の左側の下部が一部破損しています。

この板碑は上部に二条線を刻み、その下の外枠線は見られませんが、大きく阿弥陀如来を意味する主尊の梵字一字 (キリーク) を刻んでいます。その下に蓮座があり、その下の中央に造立年 (文永二年) を刻んでいます。紀年銘の両脇には、光明真言を左右二行ずつ配置しています。

玉蓮寺釈迦一尊種子板碑　1基

ぎょくれんじしゃかいっそんしゅじいたび

本庄市指定有形文化財・歴史資料
所在地　児玉
時　代　中世

この板碑は嘉元２年 (1304) 造立の釈迦一尊種子板碑で、武蔵武士児玉党の一族児玉時国の供養塔との伝承があります。全高が 240cmで幅が 54cm、厚さは６cmあって本庄市最大の板碑です。

板碑の頭部が一部破損していますが、上部に二条線を刻み、その下に三弁宝珠三個と大きな釈迦如来を示す梵字を薬研彫りで刻み、その下に蓮台を配置しています。

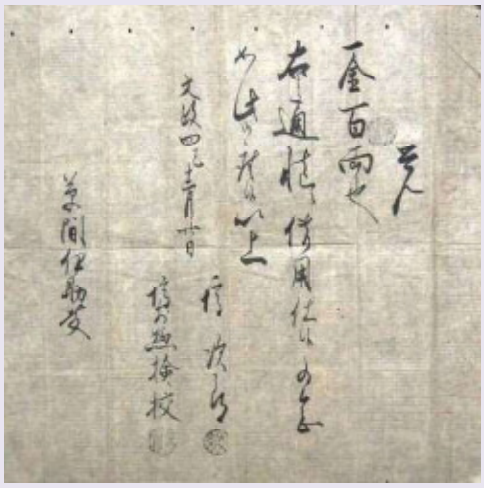
銘文は、板碑の下部が埋設と一部剥離しているため読めない部分がありますが、蓮台の下に二行の法華経の偈文、その下に四行の銘文があります。それは「化一切衆世、皆令入佛道」、「右千部法花読誦者為地主　能宗成阿等四人志亡魂竝　在家出家同心合力所乃至　法界平等利益皆成佛道也」とあります。さらにその下に紀年を刻んでいます。

塙保己一遺品及び関連資料 98 点

はなわほきいち

埼玉県指定有形文化財・歴史資料
所在地　八幡山
時　代　近世

盲目の国学者塙保己一は延享３年 (1746) に武蔵国児玉郡保木野村 (現本庄市児玉町保木野) の農家荻野家の長男として生まれました。幼くして病気にかかり７歳の時に失明してしまいました。15 歳の時に江戸へ出て雨富検校須賀一の弟子となり、盲人一座の当道座に入門しました。その後、苦労を重ね修業を積んで検校の位に昇進しました。保己一は国学の道へも進み、驚異的な記憶力と優れた人間性のもとに多くの有能な人材が集まり多くの業績を残しました。



保己一は『群書類従』の編さんや刊行、「和学講談所」の設立とその運営、さらに当道座の改革など多くの業績を残しています。
塙保己一記念館は塙保己一の遺品や関係資料を保存・展示するために昭和 43 年に開館し、その後、平成 27 年７月にリニューアルオープンし、保己一の業績を広く紹介しています。

記念館には塙保己一の遺品及び関係資料 98 点が県指定文化財となっていて、それ以外の資料と併せて 250 点余りの資料群を収蔵展示しています。

遺品の中には、保己一が生涯大切にしていた母手縫いの巾着や、保己一が江戸へ出る際に使用したそうめん箱 (お宝箱)、群書類従の版木製作のために資金を用立てた「借用証文」、保己一が総検校として発給した「告文」など、保己一が使用した道具や群書類従の版木、さらに当道座や和学講談所関係の文書史料などがあります。

八幡神社の日清戦争絵馬　1面

はちまんじんじゃ　にっしんせんそうえま

本庄市指定有形文化財・歴史資料
所在地　児玉
時　代　近代

児玉の八幡神社には日清戦争を題材に描いた大型の絵馬が1面伝えられています。

この絵馬は、日清戦争に従軍して無事帰国した児玉町出身の田島巳之吉と鈴木金平の両氏が、八幡神社の加護に感謝して明治29年(1896)に神社に奉納したものです。

作者は鳥取県会見郡米子紺屋町の絵師内山武です。絵馬の大きさは縦171cm、横273cm。

児玉新町の屋台　1台

こだまあらまち　やたい

本庄市指定民俗文化財・有形民俗文化財
所在地　児玉
時　代　近代

児玉新町の屋台はこの地域では珍しい秩父型屋台の流れをくむ大型の屋台です。秩父型屋台と児玉型山車の特徴を巧みに取り入れた児玉型屋台とも呼べるもので豪華な彫刻を持っています。屋台は明治20年代に時間をかけて建造されており、当初は車輪が4輪固定式でしたが、大正末期の改修で前輪馬車式に改められています。また舞台には回り舞台の装置が施されていました。後幕(通称弁慶の幕)は、義経と弁慶の五条の橋決闘シーンを再現した豪華な刺繍幕で、明治28年(1895)に新調されたものです。

児玉上町の山車（こだまかみちょう だし）　1台

本庄市指定民俗文化財・有形民俗文化財
所在地　児玉
時　代　近代

児玉上町の山車は、人形山車の一種ですが本庄各自治会の江戸型人形山車とは大きく異なる特徴を持っていて児玉型山車と呼べるものです。

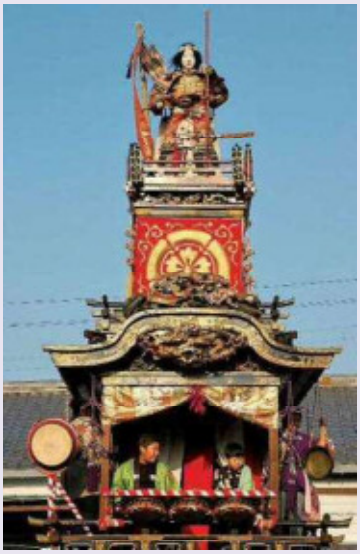
秩父型屋台と同様に屋根は前後に長くあって、人形座はその屋根の中央上に設けられています。人形座は二重の高欄を持ちますが極めて背が高いものでした。屋根の下はお囃子座と楽屋になっています。

上町の山車は明治20年代に製作が始まり30年代にかけて完成しました。秩父の宮大工の手になるともいわれています。

大正時代になって、町内に電線が架設されると、背の高い山車の引き回しが困難になり、人形座の高欄部分を低める改修をしています。

児玉仲町の山車（こだまなかまち だし）　1台

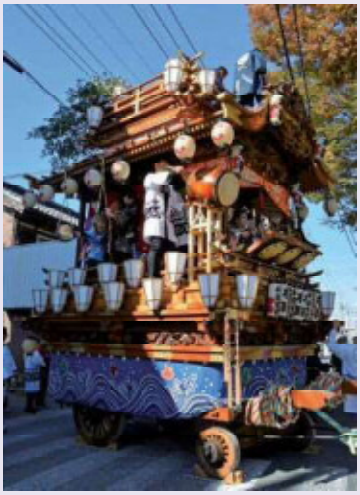
本庄市指定民俗文化財・有形民俗文化財
所在地　児玉
時　代　近代



児玉仲町の山車は明治25年(1892)に建造され、小前田村(現深谷市)の大工藤井作次郎の手により完成しました。仲町の山車も秩父型屋台と江戸型人形山車の特徴を取り入れた児玉型山車と呼べるものですが、上町の山車と比較するとより江戸型人形山車の特徴を強く打ち出しています。唐破風を持つ屋根は前後に長く、人形座は屋根の後半部にあって、屋根を貫通して車台上部まで占めています。人形座は昇降機能を持っており、そのおかげで町内に電線が架設された以後も改造せずに存続できたものと思われます。人形は神功皇后です。

児玉本町の山車　1台

本庄市指定民俗文化財・有形民俗文化財
所在地　児玉
時　代　近代



児玉本町の山車は、秩父型屋台と江戸型人形山車の特徴を合わせた構造を持つ児玉型山車と呼べるもので、児玉上町の山車とほぼ同型の山車です。

明治33年(1900)に完成しましたが、諸般の事情により当初から人形は乗せていなかったようです。そのため人形座も当初から一段のものが屋根の中央に乗せられています。

山車本体は白木造りで当初から塗装されたものではありません。児玉本町の山車と上町の山車は、児玉型と呼ばれる山車の特徴を生み出し、それが時代の変化に伴って山車自体も変化していったことを示す好例となっています。

八幡神社の能装束・能面　1括

本庄市指定民俗文化財・有形民俗文化財
所在地　児玉
時　代　近世～近代

社伝によると、雉岡城主夏目豊後守定基が神社境内に能楽殿を建立し、能興行を行ったと伝えています。江戸時代の享保年間に小宮山清右衛門が能楽を児玉に伝えたとも言われています。その後、安藤対馬守が能装束一式を奉納し、以来神社の宝物としたといいます。毎年8月15日に興行が行われ、明治初年まで続けられましたが、中断し、大正4年に一旦再興されますが現在は行われていません。

雉岡城跡（きじおかじょうあと）

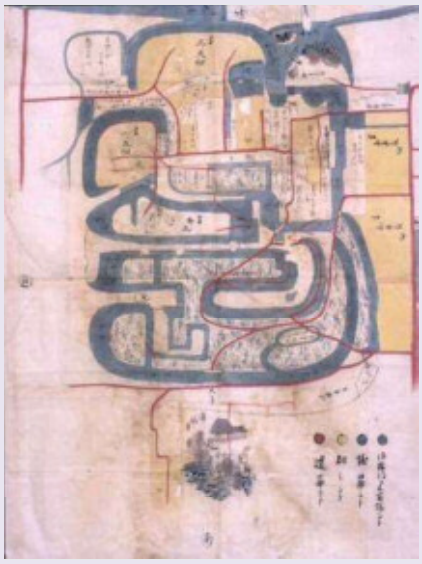
埼玉県指定記念物・史跡
所在地　八幡山
時　代　中世

雉岡城は別名を八幡山城ともいい、戦国時代初期に築かれた城です。この城が築かれている場所を「雉が岡」ということから、雉が岡城とも呼ばれます。

雉岡城は関東管領山内上杉氏が築城したといわれ、鎌倉街道上道と上杉道の分岐点内側の交通の要衝に築かれました。上杉氏は築城後在城しましたが城地が狭いとの理由で上野国平井城を築いて移り、代わりに家臣の夏目豊後守定基を城主としました。この定基と子息定盛の２代にわたって在城しました。

その後、後北条氏の武蔵進出にともなって雉岡城も北条氏の支配下に置かれ、鉢形城主北条氏邦の命により横地左近将監忠晴が城代となりました。

天正 18 年 (1590)、豊臣秀吉が小田原城の後北条攻めを開始すると、雉岡城は前田利家・上杉景勝を主力とする北国勢の攻撃を受けました。城代横地忠晴は鉢形城に逃げ、雉岡城は落城しました。その後、関東に徳川家康が入り各地に有力な家臣を配置すると、雉岡城には松平玄蕃頭家清が１万石で入城しました。家清は城下町の整備を開始しましたが、関ヶ原合戦で東軍が勝利した後、三河国吉田 (愛知県豊橋市) に転封となり、以後、雉岡城は廃城となりました。



八幡神社の高札場（はちまんじんじゃ こうさつば）

本庄市指定記念物・史跡
所在地　児玉
時　代　近世

高札場は、江戸幕府が決めた法令を板に墨書きしたもの（高札）を掲示する場所をいいます。

この高札場は江戸時代の児玉村の高札場で、上下二段に高札を掲示できるようになっています。

この高札場は従来は本町と連雀町の境付近の中山道脇往還川越道の中央にあったといわれています。交通の障害になるため現在地の八幡神社北西隅に移設されました。

長沖32号墳（ながおき ごうふん）　1基

本庄市指定記念物・史跡
所在地　児玉南
時　代　古代（古墳時代）

総数200基を超える県内最大の古墳群、長沖古墳群の一角を占める前方後円墳です。小山川左岸の河岸段丘上にあり、主軸長は現状で32mですが、本来は40ｍ以上の規模があったと推測されます。埋葬施設の形状は明らかになっていませんが、周囲の掘から出土した円筒埴輪や朝顔形埴輪の形態から、6世紀中頃に築造された古墳と考えられ、現在は本庄市長沖古墳公園の中に保存されています。

思池（おもいけ）のマルバヤナギ　３本

本庄市指定記念物・天然記念物
所在地　児玉

児玉思池親水公園内に３本のマルバヤナギの古木があります。かつては細長く思池が所在した畦に生育していたものでした。国道254号線のバイパスが近くを通過したため、池が東西に分断され、さらに西側の市街化が進んだため、西側に残された池は消滅しています。

マルバヤナギはヤナギ科に属する落葉高木で、大木になると樹高が20ｍに達します。葉が楕円形をしていて幅が広いことからこの名がついています。別名をアカメヤナギともいい、若葉が赤くなることからそう呼ばれています。マルバヤナギは水辺に多くが自生し、湿地を好む性質のため、水利に恵まれない児玉地域では珍しい樹木です。思池親水公園には３本のマルバヤナギがまとまって自生していて、いずれも古木で、内２本は幹回りが３ｍ弱にも達します。

八幡（はちまん）神社（じんじゃ）のヤブツバキと社叢林（しゃそうりん）　１群

本庄市指定記念物・天然記念物
所在地　児玉

児玉地域に鎮座する八幡神社は社伝によれば八幡太郎義家が祀ったとの由緒を持つ古社で、かつては境内一円が樹木で覆われ、まさに鎮守の森と呼ばれる景観を呈していましたが、近年、諸般の事情によって失われた古木が多くあります。しかしながら現在でもケヤキなどの古木が多く残されており、中でも目通し１ｍ55㎝のヤブツバキの古木や、目通しで４ｍを越えるケヤキが４本、３ｍを越えるものも９本あって社叢林を構成しています。

児玉市街地のほぼ中央に位置する八幡神社は、この社叢林により大変貴重な緑地帯を形成しています。

児玉町旧配水塔（こだままちきゅうはいすいとう）　１基

国登録有形文化財
所在地　児玉
時　代　近代

旧児玉町地域は昔から水利の便が悪い地域で、早期の近代水道の建設が望まれていました。大正 14 年 (1925) に児玉町議会内に水道計画調査特別委員会が設置され、身馴川・赤根川を水源とする事業計画が策定されました。昭和３年 (1928) ３月に水道敷設の認可が下り、４月には起工式が行われました。

児玉町水道は、給水区域を市街地とし、給水人口を 5,000 人、一日最大給水量を 500 立方メートルとしました。昭和３年に工事に着手し、昭和６年 (1931) に完成しました。

配水塔は児玉水道事業の重要な施設の一つで、設計は埼玉県技師の宮原雄次郎が行っています。配水塔は塔の上部を貯水槽とする高架水槽で、下部にポンプ室を配置しています。前面には階段室 (梯子室) を取り付けています。また塔の上部には排気用の小ドームが取り付けられ、上部外側には回廊が設けられています。塔全体はコンクリート造りの円筒形をしています。

階段室部分は５層となっていて円形の窓が三つ付けられ、その上に同型の枠があって、「コタマ水」を図案化したマークが付けられています。

円筒型の配水塔は上部・下部ともほぼ同じ太さで、屋根部はドーム状になっています。このドームは鉄筋入りのコンクリート造りとなっています。配水塔の規模は高さ 17.7 m、内径 6.4 m、水槽の容量は 130 キロリットルです。

児玉町旧配水塔は近代水道の建造物として埼玉県唯一の塔型配水塔で、近代水道の文化遺産として貴重な構造物です。

児玉地域中部の文化財

塙保己一旧宅（国指定史跡）

児玉地域中部のマップ

児玉地域中部の歴史と文化財

この地域は西から西南方向に上部山地が広がり幾筋かの谷で構成され、東部にかけては丘陵地が広がっています。北東側は一部条里水田があり古代から開発された地域ですが、末期には児玉党塩谷氏の登場がみられます。塩谷の真鏡寺一帯は中世館跡と思われ、堀跡や土塁が一部残っています。さらに伝渋谷金王丸の墓が館跡内にあります。また飯倉地内には御厨跡と伝える場所も存在します。金屋には室町時代より鋳物師集団が存在し、天龍寺には金屋鋳物師製作の銅鐘があります。高柳の長泉寺は古刹ですが、戦国時代には武田・後北条氏の禁制を所蔵し、さらに骨波田の藤は樹齢数百年の古木で見事な花を咲かせます。江戸時代になると、地域北部の保木野出身の盲目の国学者塙保己一が登場し、江戸で大いに活躍しますが、生地の保木野に塙保己一旧宅があります。

塙保己一旧宅（はなわ ほ き いちきゅうたく）

国指定文化財・史跡
所在地　保木野
時　代　近世

本庄市児玉町保木野には江戸時代後期の盲目の国学者塙保己一の生家が残されています。

塙保己一は延享３年 (1746) ５月５日に武蔵国児玉郡保木野村の農家の長男として生まれました。５歳の時病気になり、７歳で失明、15 歳で江戸に出て盲人一座 (当道座) に入門しました。

保己一は苦労を重ねて立身し、晩年には最高位の総検校に昇進しました。また国学の道に進み、一大叢書である『群書類従』及び『続群書類従』等を編さんし、さらに和学講談所を設立するなど、多大な功績を残しています。

文政４年 (1821) ９月 12 日、保己一は江戸で亡くなりました。76 歳でした。

保己一の旧宅は、茅葺き入母屋造り二階建て住宅で、屋根の茅は四方を大きく切り上げた養蚕住宅となっています。この旧宅は保己一の父宇兵衛の代に建てられたと伝えられています。建築年代は保己一の生まれた延享３年より少し遡りそうで、桁行７間半、梁間４間の規模を持ち、内部は三室広間型の平面形を持つ江戸中期の上層農家の形態が窺えます。

塙保己一旧宅母屋平面図

長泉寺開山堂格天井絵（ちょうせんじかいざんどうごうてんじょうえ）

本庄市指定有形文化財・絵画
所在地　高柳
時　代　近世

高柳の長泉寺開山堂の天井には花鳥図が85枚描かれています。中央の大枠内は雲龍画が描かれ、周囲の杉板材に花鳥画が描かれています。作者は不明ですが、狩野派の流れをくむ絵師によるものと言われています。

現在、65枚は本堂の天井に移されています。

長泉寺木造延命地蔵尊半跏坐像 1躯（ちょうせんじもくぞうえんめいじぞうそんはんかざぞう）

本庄市指定有形文化財・彫刻
所在地　高柳
時　代　近世

この地蔵菩薩は、左脚を蓮台の下に下ろす半跏座像で、左手に宝珠、右手に錫杖を持っています。玉眼を嵌入し、白毫珠を持っていて、全体にきれいな修復がなされています。

この地蔵菩薩は、元の長泉寺の奥の院だった延命禅寺の本尊の延命地蔵菩薩像で、天保13年(1842)に延命寺が火災で焼失したときに、この本尊は無事持ち出され、その後、長泉寺の山門二階に安置されたと伝えられます。なお、現在は長泉寺の山門二階には聖観世音菩薩、持国天、廣目天とともに安置され、延命地蔵として信仰されています。

天龍寺の銅鐘（てんりゅうじ どうしょう）　１口

埼玉県指定有形文化財・工芸品
所在地　金屋
時　代　近世

天龍寺は戦国時代の元亀年間に児玉郡飯倉村にあった興龍禅院を雉岡城の城代であった横地左近将監忠晴が天正期に現在地に移転させたといいます。

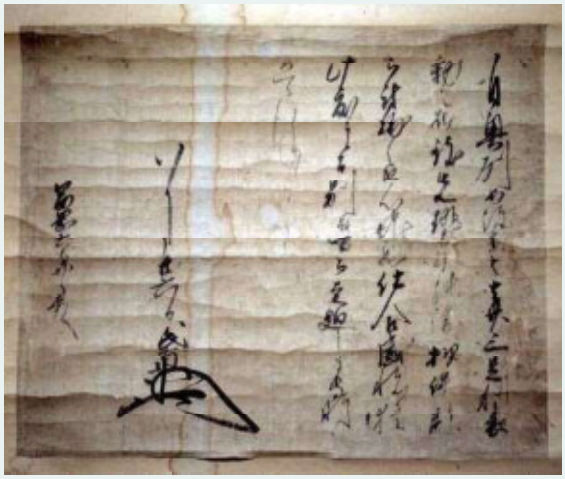
この銅鐘は天龍寺の山門二階に吊されており、地元の鋳物師集団である金屋鋳物師の代表的な作品の一つです。法量は高さ 136cm、直径 76cmをはかります。

天龍寺のある金屋地区は室町時代より金屋鋳物師が集住して活躍した土地柄で、この銅鐘も地元鋳物師の残した作品として貴重なものです。

銘文は池の間と呼ばれる４区に刻まれていて、内１区は陽刻で、残りの３区は陰刻となっています。鋳造は宝永８年 (1711) で、鋳物匠工の倉林太左衛門金貞と同茂左衛門金珍の名を刻んでいます。

飯倉富岡家中世文書（いいぐらとみおかけちゅうせいもんじょ）　１点

本庄市指定有形文化財・古文書
所在地　飯倉
時　代　中世

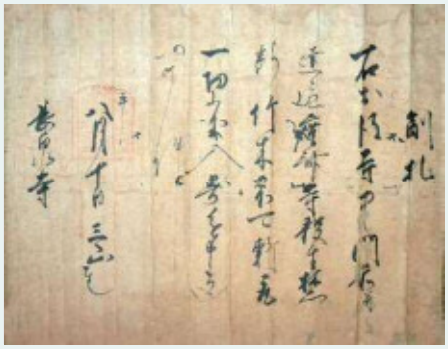


天正 16 年 (1588) ８月 26 日に比定される小田原城主北条氏直の書状。

上州小泉城 (群馬県太田市) 主の富岡六郎四郎 (秀長) に宛てた書状で、内容は叔父である八王子城主の北条氏照よりの注進によって富岡六郎四郎の下野国足利表での活躍を賞したものです。

長泉寺中世文書（ちょうせんじちゅうせいもんじょ）　2点

本庄市指定有形文化財・古文書
所在地　高柳
時　代　中世



高柳の長泉寺には永禄 12 年 (1569) の武田家高札と、元亀元年 (1570) の北条家制札を所蔵しています。永禄 12 年の 11 月に武田信玄は武蔵国の秩父・児玉両郡に侵入し、11 月 19 日には長泉寺に高札を出しています。内容は自軍兵士の長泉寺における乱暴狼藉を禁止したものです。翌年の２月頃に鉢形勢と一戦を交えた様で、その後、武田勢は帰国しています。元亀元年８月 10 日には、鉢形城主北条氏邦は長泉寺の寺中や門前、さらに広斉寺 (興西寺＝長泉寺の末寺で小平村にあった) での殺生禁止、竹木切り取り禁止の制札を発給しました。このように短期間に長泉寺周辺地域は武田・北条両軍の争奪場となっており、この地域における長泉寺の重要性が感じられます。

金屋倉林家中世文書（かなやくらはやしけちゅうせいもんじょ）　1点

本庄市指定有形文化財・古文書
所在地　金屋
時　代　中世

天正 14 年 (1586) と推定される北条家伝馬手形。

この文書は、後北条家が領国をつなぐ交通網として伝馬制度を整備し、各地の有力者に伝馬手形を発給して交通網の維持を図ったことを伝えています。

印判は後北条氏独特の馬をあしらったものです。伝馬手形専用に用いられています。文面には上州の鋳物師に下されるとありますが、この文書が伝来したのが武州児玉郡金屋の鋳物師倉林家であることから、最初から金屋の鋳物師に伝えられたもので、一時期、この地域を上州の一部と認識されたことがあったのでしょう。

保木野の円形光背図像板碑　１基

（ほきの　えんけいこうはいずぞういたび）

本庄市指定有形文化財・歴史資料
所在地　保木野
時　代　中世

乾元２年 (1303) 銘の阿弥陀一尊種子図像板碑。

この板碑は主尊が種子 (梵字) ではなく、円形の光背を持つ阿弥陀如来の図像で表現されていることに特徴があります。図像は陰刻線で表現し、蓮華台の下に一対の蓮華瓶を配しています。この板碑は宅地内より掘り出されたといわれていますが、山形部の一部が破損しているものの形態はよく整っています。

法量は全高 117cm、幅は 30.5cmから 32cm、厚さは 2.5cmあります。

保木野の宝篋印塔板碑　１基

（ほきの　ほうきょういんとういたび）

本庄市指定有形文化財・歴史資料
所在地　保木野
時　代　中世

貞治３年 (1364) 銘の阿弥陀一尊種子板碑。この碑の特徴は蓮座の下に宝篋印塔を大きく陽刻することです。宝篋印塔の右側に「比丘尼妙阿七部全得逆修也」と刻み、左側には「貞治三年甲辰八月□日」と刻んでいます。銘文からこの板碑が妙阿という女性の生前供養のために造立されたことがわかります。

なお、この板碑と対になる板碑が隣町の神川町長慶寺に残されていて、長慶寺の板碑は「右志者為沙弥道栄七部全得逆修也」とあって、この２枚の板碑が双碑で、夫婦逆修板碑であったことがわかります。

この宝篋印塔板碑の法量は、全高が頭部の二条線より上が欠失していますが 113cm、幅 34 ～ 37cm、厚さが３～ 3.5cmあります。

長沖の庚申塔（ながおき こうしんとう）　１基

本庄市指定民俗文化財・有形民俗文化財
所在地　長沖
時　代　近世

庚申塔は庚申信仰で造られた石仏の一種で、この庚申塔は舟形の本体に主尊として円形光背を持つ地蔵菩薩を配しています。市内には800基近くの庚申塔があり、一部の庚申塔は主尊に青面金剛像を用いますが、数的には文字で「庚申」・「庚申塔」・「庚申供養塔」と刻むものが圧倒的に多く所在します。

主尊に地蔵菩薩像を刻むものは本市では珍しく、銘文は摩滅しているため造立年も確認できませんが、江戸時代初期の造立ではないかと推定されます。

なお、地蔵菩薩像の足下に蓮台があり、その両脇に鶏と猿を一つずつ刻んでいます。

コラム④　本庄市の石仏（庚申塔）

市内には江戸時代に造られた石仏・石神と呼ばれる石造物が多数遺されています。その中で最も数量が多いのが庚申塔です。庚申塔とは、庚申信仰によって造立された石造物で、庚申信仰は中国から伝わった道教の教えに関係があります。昔、人間の体の中に「三尸（さんし）の虫」がいて、庚申の夜に人が寝ている間に抜け出して天に昇り、天帝にその人間の罪科を報告するといいます。するとその罪の重さによってその人の寿命が決まってしまい、昔の人々は、人は少なからず誰しもが罪を犯しているため、それから逃れる方法として庚申の夜は寝ずに過ごせば良いと信じられていました。この信仰は日本全国に広がり、各地で庚申講が作られ庚申塔がたくさん造立されました。特に本庄周辺では庚申の年（延宝８年・元文５年・寛政12年・万延元年・大正９年＝60年に一度庚申の年が回ってくる）には特に多くの塔が造られました。

庚申塔は主尊に青面金剛像を用いたものが多いのですが、江戸時代後期には文字塔（文字で庚申・庚申塔・庚申供養塔などと刻む）が増加しました。

左より小和瀬、上仁手、沼和田、長沖の庚申塔

岡登景能の生地（おかのぼりかげよしせいち）

埼玉県指定記念物・旧跡
所在地　高柳
時　代　近世

幕臣で旗本の岡登次郎兵衛景能は寛永10年(1633)に武蔵国児玉郡高柳村に生まれたと伝えられます。成長して父の後を継いで幕府代官になりました。景能は有能な官吏で、特に上野国笠懸野の開拓に手腕を発揮しましたが、一部民衆の騒動に始まって、部下の手代のおこないなどで追求を受け自刃しています。後世、地元ではその功労を再評価し、大正12年(1923)には従五位を追贈され名誉を回復しました。

生地の高柳(現本庄市児玉町高柳)には、岡登次郎兵衛景能の生誕の地碑が建立されています。

飯倉御厨跡（いいぐらみくりやあと）

埼玉県指定記念物・旧跡
所在地　飯倉
時　代　古代

寿永3年(1184)に源頼朝は私願成就のため伊勢神宮に武蔵国飯倉御厨一所を寄進した記事が『吾妻鏡』に見えています。また『神鳳抄』(伊勢神宮の所領を記した書)にも「飯倉御厨当時四貫文　同飯倉御厨長日御幣五十丁」と記されています。

現在、飯倉地内の字日向山に大神宮山と呼ばれている5畝23歩(約570㎡)の山林があり、昭和初期には豊受神宮の小さな祠がありました。また付近には御厨川が流れています。

なお、武蔵国飯倉の地は、この本庄市児玉町飯倉以外にも東京都に飯倉の地名が残っています。

骨波田の藤（こつはたふじ）　７本

埼玉県指定記念物・天然記念物
所在地　高柳

長泉寺境内には「骨波田の藤」と呼ばれる房長が１ｍを越える古木の藤があります。一説に江戸時代の中期、宝暦３年(1753)に仏国哲眼大和尚が伊豆最勝院より当寺第19世として入山した際に、山路で供の荷物の紐が切れ、近くで咲いていた藤の蔓で荷物を結わいて代用したものが、当寺で根付いたものと伝えられています。これによれば樹齢は260年余りとなりますが、哲眼大和尚の偈に「当山の繁栄は紫雲台に達す、藤波の永きこと骨波田の山門と共に存す」とあって、哲眼大和尚が当寺に居た時には、既に房の長いこの藤があったものと思われることから、樹齢もそれ以上と思われます。

保木野龍清寺のカヤ（ほきのりゅうせいじ）　１本

本庄市指定記念物・天然記念物
所在地　保木野

保木野の龍清寺境内には１本のカヤの古木があります。このカヤは斜めに延びていることから、まさに飛び立とうとする龍神をイメージし、「飛龍のカヤ」と呼ばれています。

目通り周囲約４ｍ

樹高約14ｍ

児玉地域南部の文化財

成身院百体観音堂と唐銅造大日如来坐像（本庄市指定文化財）

児玉地域南部マップ

児玉地域南部の歴史と文化財

秋山には山頂に十二天社があり、神仏混合の神社で十二天堂とも呼ばれました。また尾根続きで陣見山と続き、戦国時代にはここから雉岡城の様子を窺ったという陣見平があります。秋山の東側は平坦地で、秋山古墳群が分布し、前方後円墳の諏訪山古墳や、二重周溝を持つ円墳の庚申塚古墳があります。小平には古刹の成身院があり、境内堂に浅間山大噴火の犠牲者の菩提を弔ったさざえ堂と呼ばれる百体観音堂があります。また山中には修験道場であった岩谷堂や、鎌倉時代造立の大型五輪塔を納めたほてい堂があり、風洞には珍しい室町時代の石幢があります。また近代には児玉用水の貯水池として間瀬堰堤が偉観を見せています。

本泉地区の太駄は上州あるいは児玉・本庄と秩父を結ぶ交通路の中心で、中世には太駄郷を称していて、近世においてもその中心地に高札場が残っています。

じょうしんいんひゃくたいかんのんどう
成身院百体観音堂　1棟

本庄市指定有形文化財・建造物
所在地　小平
時　代　近代

百体観音堂は児玉町小平の新儀真言宗豊山派の地方本寺であった成身院の境内堂の一つです。

天明３年(1783)に起きた信州浅間山の大噴火の犠牲者を弔うために、成身院69世元真は利根川の河畔で法華経一万部真読を行い百観音造立を発願しました。しかし生前その願いは叶わず、弟子で71世住職の元映が師の意志を継いで、百観音造立、観音堂の建設のため江戸を初めとして各地を奔走しました。多くの人たちの協力を得て寛政７年(1795)には観音堂の完成をみました。外観２層、内部３層の回廊式となっていて各階に西国・坂東・秩父の鋳造仏の百観音が安置されました。しかしながら火災のため明治21年(1888)に焼失しましたが、明治42年(1909)に再建されました。

百体観音堂は通称「さざえ堂」とも呼ばれるように、特殊な構造を持つ珍しい建築様式です。そのため全国的にも数は少なく、類例が東日本に残されています。群馬県太田市の曹源寺、茨城県取手市の長禅寺、福島県会津若松市の飯盛山、青森県弘前市の蘭庭院六角堂などがあります。

秋山十二天社社殿（あきやまじゅうにてんしゃしゃでん）　1棟

本庄市指定有形文化財・建造物
所在地　秋山
時　代　近世

秋山十二天社は神仏混合の神社で、十二天堂とも呼ばれていました。『新編武蔵風土記稿』によれば、「大同年中の勧請と云、那賀郡十四ヶ村の惣鎮守なり・・・今も護摩所、籠堂、蚕ノ宮等そなはれり」とあります。

江戸時代の十二天社は度々火災に見舞われ、寛政11年(1799)に総柿葺き権現造りで再建されました。棟梁は藤原富房。その後、屋根は昭和54年に銅板葺きに改修されています。なお、かつて応永28年(1421)銘の那珂郡十二天宮鰐口が境内から出土しています。

成身院の三仏（じょうしんいん　さんぶつ）　3躯

本庄市指定有形文化財・彫刻
所在地　小平
時　代　中世

成身院の境内堂の一つの三仏堂の本尊です。左より木造薬師如来坐像、木造阿弥陀如来坐像、木造釈迦如来坐像の3体です。この3体の仏像にはそれぞれ胎内墨書があり、それによれば、阿弥陀と釈迦如来坐像の2体は、応永12年(1405)に下総国北相馬郡黒崎郷米井村で造られました。その後、いつの頃か武蔵国那珂郡小平村の成身院に移され、天文15年(1546)に成身院にて金色彩色がなされたとあります。薬師如来坐像は、寛正7年(1466)に成身院で造られています。このことから本来は下総国の龍禅寺(茨城県取手市)にある三仏堂の本尊の内阿弥陀と釈迦如来の2体が何らかの理由で小平の成身院に移され、成身院では寛正7年に薬師如来坐像を造って三体を整えたものと考えられます。

唐銅造大日如来坐像（からどうづくりだいにちにょらいざぞう）　1 躯

本庄市指定有形文化財・工芸品
所在地　小平
時　代　近世

成身院百体観音堂の前に鎮座します。唐銅造りの鋳造仏で、像高は 85cmあります。

台座には銘文が刻まれ、「御鋳工武州金屋住倉林治兵衛国義、補鋳工野州佐野住丸山林八長暉」とあります。地元金屋鋳物師の作品の一つで、台座以外にも円形光背・蓮台・台座にも多数の寺院名や個人氏名が刻まれていて、この像の造立に多数の人たちが係わったことがわかります。

造立年は見られませんが、「成身院文書」によれば、百観音造立を発願した成身院 69 世元真の遺命によって、供養法要に参列した多くの僧侶や村民が中古金物を持ち寄り、これを鋳つぶして二尺五寸の大日如来を造立したとあります。百体観音堂の完成が寛政７年 (1795) 頃と推定されますので、ほぼ同じ頃に造られたものと思われます。

成身院百体観音堂の鰐口（じょうしんいんひゃくたいかんのんどうわにぐち）　1 口

本庄市指定有形文化財・工芸品
所在地　小平
時　代　近世

百体観音堂に架かるこの鰐口は、直径が 180cm、厚さ 60cm、重さが 750kgもある大鰐口で日本でも有数の規模を誇っています。

銘文が表に「施主、惣村中、十方萬人講中、西村和泉守」とあり、裏側には「世話人二十三名、寛政七年 (1795) 乙卯春三月」が刻まれています。

明治 21 年 (1888) に百体観音堂が火災で焼失した時にも幸いに焼け残り、明治 42 年 (1909) の再建時に再び吊るされました。

この様な直径が２ｍにも及ぶ巨大な鰐口は東日本に３例が知られています。それは本市の百体観音堂の鰐口と、群馬県伊勢崎市の石山観音の鰐口 (天明７年銘＝ 1787 年) と埼玉県越谷市の浄山寺の鰐口 (天保 12 年銘＝ 1841 年) です。

元田の板石塔婆（げんだ いたいしとうば）　１基

埼玉県指定有形文化財・考古資料
所在地　元田
時　代　中世

大型の板石塔婆（板碑）で、一石に三基の板碑を表現した三連碑です。中央の塔婆に刻まれた主尊の梵字のキリークは阿弥陀如来をあらわし、大きく縦長に配置し、脇侍に相当する左右の塔婆には、梵字のサ・サクを通常の位置より低い位置に配置しており、阿弥陀三尊の配置の均衡を保っています。

材質は緑泥片岩で、全高が204cm、厚さは９cmです。板碑は主尊の下に蓮座を刻みますが、この板碑の蓮座は線刻で刻み、さらに蓮が逆さまに刻まれていることも大きな特徴となっています。銘文は右側に「正嘉二年」、左側に「戊午二月十日」と刻んでいます。

板碑を複数並べて一石で表現した例は、２基を一石で表現した連碑が埼玉県の小川町周辺に16例ほどありますが、３連碑は他に類例がなく極めて珍しいものです。この板石塔婆は現在保護のために鞘堂の中に納められています。

正嘉２年＝1258年

ほてい堂の五輪塔（ごりんとう）　２基

本庄市指定有形文化財・歴史資料
所在地　小平
時　代　中世

児玉町小平地区の根岸廓と呼ばれる集落の中にほてい堂（布袋森堂）があります。この堂内に大型の五輪塔２基が納められています。

右側の塔は、空風輪の破損がひどく、ごく一部のみが乗っている状態ですが、塔の全高は現状で176cmあって、造立当初は２ｍを越える規模があったものと思われます。左の塔も全高が136cmほどあって同じように空風輪の破損がひどいことから、170cm近くはあったものと思われます。２基とも材質は凝灰岩で、火輪と水輪の形態から鎌倉時代の造立と推定されています。

銘文は見られず、梵字のみ刻まれています。造立者は不明ですが、規模の大きさを考えると相当のな実力者の供養塔か墓塔と思われます。

風洞の石幢　１基

本庄市指定有形文化財・歴史資料
所在地　風洞
時　代　中世

石幢とは須弥壇脇に見られる細長い布製の幢幡を６面又は８面に合わせた形に石造物として表したものです。単制と重制があり、重制は灯籠に似ていますが、笠にワラビ手がないこと、龕部に火口がないこと、竿部に節がないことなどの違いが見られます。

この六面重制石幢には、極めて多くの特徴が見られます。それは笠部・龕部・中台部が六角形をしていること、相輪部の請花部と笠の側面、基礎の四面に縦筋模様が見られることなどです。また基礎の前面左右には枠内に銘文の痕跡が見られますが、判読は困難です。造立年は銘文が不明のため判然としませんが室町時代のものと推定されます。この様な重制石幢は秩父郡から児玉郡にかけて多く分布しており、長瀞町・皆野町・上里町・神川町・美里町に完形のものが残されています。

法量は全高が 161cm、幅は 62cmあります。なお、この石幢の竿部には輪廻車の取り付けた穴は見られません。市内にはこの塔以外にも石幢が数基存在したようで、笠部や中台などの部品が見られます。ただしこれらはいずれも六角ではなく四角形をしています。

浄厳の画像及び墨跡　１括

本庄市指定有形文化財・歴史資料
所在地　小平
時　代　近世

浄厳は江戸時代後期の木食僧で、精蓮社勇譽進阿瑞厳浄厳と称しています。武蔵国那賀郡小平村にある紫雲窟岩谷堂で修業した後、佐渡に渡って念仏道場を開きました。

地元小平には浄厳の御真影２点と高僧血脈軸に浄厳名号軸の４点が伝えられています。また佐渡にも類似する画像・墨跡が残されています。

金鑽神楽太駄組（かなさなかぐらおおだぐみ）

本庄市指定民俗文化財・無形民俗文化財
所在地　太駄
時　代　近代～現代

金鑽神楽十三組の一つです。明治 26 年 (1893) に金鑽神楽本庄組の師事を受けました。

鎌倉時代に神楽・田楽等勃興とともに神社特有の神楽が組織されたものの流れをくんでいます。

現在、太駄の岩上神社の祭礼で奉納されています。

金鑽神楽根岸組（かなさなかぐらねぎしぐみ）

本庄市指定民俗文化財・無形民俗文化財
所在地　小平
時　代　近代～現代

同じく金鑽神楽十三組の一つに属しています。明治 15 年 (1882) の金鑽神楽再編により金鑽神楽根岸組が結成されたといいます。

明治初年に大里郡用土村 (現寄居町大字用土) に伝来した神楽面、装束等を譲り受け、村の人たちに指導したといいます。現在は活動を休止しています。

小平の獅子舞（こだいらのししまい）

本庄市指定民俗文化財・無形民俗文化財
所在地　小平
時　代　近世～現代

元禄 12 年 (1699) に皆野町に伝わった獅子頭を小平の成身院 42 世覚桑和尚が譲り受けたことが始まりといいます。厄除け、悪魔払い、雨乞いなどで舞われ、現在は日本神社の春祭り、石神神社の秋祭りで奉納されます。構成は舞人３人、唄２人、笛吹き７人、花笠２人、天狗１人です。

西小平の万作（にしこだいら まんさく）

本庄市指定民俗文化財・無形民俗文化財
所在地　小平
時　代　近代～現代

市内児玉町小平の西小平地区に伝わる万作は、伊勢音頭を手踊りの基本とするもので、明治21年(1888)頃に美里町広木から伝えられ、明治時代末期から大正時代にかけてが最盛期で、鑑札を取って各地で上演されました。現在は日本神社の春の例祭で上演されます。

元田の万作（げんだ まんさく）

本庄市指定民俗文化財・無形民俗文化財
所在地　元田
時　代　近代～現代

元田の万作は、大正時代の初め頃に榛澤(現深谷市)から伝えられたもので、村の若者達によって始められ、この村で貴重な娯楽の一つとして親しまれ、神社の祭礼の時に奉納されました。

大正時代は主に手踊りを行い、昭和に入り12年頃になると芝居も行われるようになりました。現在は活動を休止しています。

太駄の高札場（おおだ こうさつば）

本庄市指定文化財（記念物）・史跡
所在地　太駄
時　代　近世

江戸時代の太駄村の高札場。秩父道(児玉と秩父大宮を結ぶ道)と上州道(太駄の殿谷戸から上州鬼石を結ぶ道)の分岐点の交通の要所に所在します。高札場の所在する場所は位置的にも太駄のほぼ中央となっています。

秋山庚申塚古墳　付出土品
あきやまこうしんづかこふん

本庄市指定文化財（記念物）・史跡
所在地　秋山
時　代　古代（古墳時代）

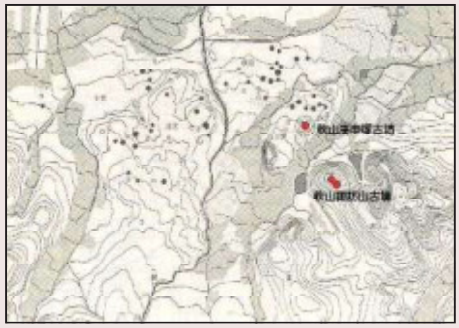
秋山古墳群の南東の端に位置する直径34ｍ、高さ約５ｍの円墳で、前方後円墳の秋山諏訪山古墳を除くと、群内では最大規模の古墳になります。周囲には円墳では珍しい二重の堀がめぐり、墳丘や堀の中堤に円筒、家、人物、馬などの埴輪が立てられていました。埋葬施設は胴張型横穴式石室で、壁面構成は模様積みを採用しています。

副葬品は金銅製の雲珠や辻金具といった馬具類のほか、瑪瑙製や碧玉製の勾玉、鉄鏃、刀装具、弓金具、刀子、金銅製耳環などがあり、とくに馬具は三組存在することから、最初の人物が葬られたあと、少なくともさらに二人の人物が葬られているようです。古墳の築造年代は６世紀後半で、その後７世紀初頭にかけて追葬が行われたと考えられます。

秋山古墳群
あきやまこふんぐん

本庄市指定文化財（記念物）・史跡
所在地　秋山
時　代　古代（古墳時代）

小山川右岸の丘陵先端部を中心に分布する古墳群で、現在、前方後円墳２基を含む43基の古墳が現存しています。すでに、消滅している古墳も多く、当初は100基を超える規模であったことが推定されます。築造時期の判明する古墳の中では、全長約60mの前方後円墳、秋山諏訪山古墳が６世紀前半で最も古く、以後７世紀にかけて多くの円墳が造られていったと考えられています。



秋山古墳群の状況

岩谷堂（いわやどう）

本庄市指定文化財（記念物）・史跡
所在地　小平
時　代　近世

岩谷堂は江戸時代に浄土宗僧の浄厳が一向専修念仏道場として開いたものです。岩谷洞とも書きます。

江戸時代末期、広く信仰を集め、この地に続く道を岩谷道といい、参道の両脇には多くの石仏が奉納されています。毎年春には万霊供養祭が行われています。

陣見平（じんみだいら）

本庄市指定記念物・旧跡
所在地　小平
時　代　中世

標高５３１ｍの陣見山山頂部から北に伸びる尾根一帯を陣見平と呼びます。その名の由来は天正 18 年 (1590) に豊臣秀吉が小田原城の後北条氏を攻めたときに、豊臣方の北国勢が雉岡城を攻めました。その際に事前にこの山に登り、城内の様子を窺ったとの話が伝わっています。

石神神社のケヤキとスギ　２本（せきじんじんじゃ）

本庄市指定記念物・天然記念物
所在地　小平

市内児玉町小平の鎮守石神神社には御神木のケヤキとスギの古木があります。

御神木のケヤキは社殿のすぐ右側にあり、根元から中央部付近までは真っ直ぐ上に延びています。樹齢は不明ですが、近世初期に社殿造営後に植えられたと推定されます。

社殿の左側奥には、真っ直ぐ上に延びた古木のスギがあります。

目通り周囲ケヤキ 約５ｍ、スギ 約 4.6 ｍ。樹高 ケヤキ 約 35 ｍ、スギ 約 37 ｍ。

間瀬堰堤（まぜえんてい）　1基

国登録有形文化財
所在地　小平
時　代　近代

間瀬堰堤は県営事業として建設された児玉用水普通水利組合の農業用ダムです。

昭和３年(1928)に当時の児玉町・金屋村・秋平村・共和村・松久村・東児玉村・北泉村・榛澤村で普通水利組合を結成し、間瀬川中流部の秋平村小平の間瀬に貯水池を建設することを計画しました。県に陳情を行った結果、県営事業として昭和３年から昭和10年までの８ヶ年の継続事業として建設が行われました。工事は難工事となり、完成は昭和12年(1937)３月でした。

間瀬堰堤はダムの形式が、玉石混疑土重力堰堤(重力式コンクリートダム)で、堤高27.5ｍ、堤長126ｍ。堤体積22,000立方メートルで、貯水量は530,000立方メートルです。間瀬堰堤は埼玉県で最初に建設された本格的な重力式ダムで、東日本に現存する農業用重力式ダムとしては最古のもので、貴重な近代化遺産です。

間瀬堰堤管理橋（まぜえんていかんりきょう）　1基

国登録有形文化財
所在地　小平
時　代　近代

昭和13年(1938)に完成。鉄筋コンクリート造桁橋。間瀬堰堤の堰堤部すぐ下の頭首工に設けられました。

この管理橋は間瀬堰堤と一体をなす構造物で、頭首工上に鉄筋コンクリート製の橋を設け、橋の規模は長さ9.5ｍ、幅員が２ｍあります。左岸部に取水口を設けています。

本庄市の指定文化財・登録文化財一覧

本庄市の指定文化財・登録文化財

平成 29 年 3 月 31 日現在

【国指定文化財】

番号	種　別	名　称	所　在　地
1	史　跡	塙保己一旧宅	児玉町保木野 325

【県指定文化財】

番号	種　別	名　称	所　在　地
1	建造物	競進社模範蚕室	児玉町児玉 2514
2	建造物	旧本庄警察署	中央 1-2-3
3	建造物	八幡神社社殿及び銅製鳥居	児玉町児玉 198
4	建造物	諸井家住宅	中央 1-8-1
5	建造物	本庄金鑽神社社殿	千代田 3-2-3
6	絵　画	絹本着色清拙正澄画像	中央 2-8-26
7	彫　刻	木造阿弥陀三尊像	児玉町児玉 100
8	工芸品	天龍寺の銅鐘	児玉町金屋 142-1
9	考古資料	元田の板石塔婆	児玉町元田 263
10	歴史資料	塙保己一遺品及び関係資料	児玉町八幡山 368
11	無形民俗文化財	台町の獅子舞	本庄
12	史　跡	雉岡城跡	児玉町八幡山 446
13	史　跡	鷺山古墳	児玉町下浅見 818-1
14	史　跡	宥勝寺裏埴輪窯跡　付鞍形埴輪４点	北堀字前山
15	天然記念物	骨波田の藤	児玉町高柳 901
16	天然記念物	金鑽神社のクスノキ	千代田 3-2-3
17	天然記念物	城山稲荷神社のケヤキ	本庄 3-5
18	旧　跡	岡登景能の生地	児玉町高柳 146-2
19	旧　跡	飯倉御厨跡	児玉町飯倉 841
20	旧　跡	荘小太郎頼家供養塔	栗崎 155

【市指定文化財・有形文化財】

番号	種　別	名　称	所　在　地
1	建造物	本庄金鑽神社大門	千代田 3-2-3
2	建造物	田村本陣の門	中央 1-2-3
3	建造物	円心寺山門	本庄 3-3-2
4	建造物	安養院本堂・山門及び総門	中央 3-3-6
5	建造物	八幡神社随身門	児玉町児玉 198
6	建造物	八幡神社能楽殿	児玉町児玉 198
7	建造物	成身院百体観音堂	児玉町小平 647
8	建造物	秋山十二天社社殿	児玉町秋山 3566
9	絵　画	紙本着色武田信玄公画像	中央 2-8-26
10	絵　画	宮戸八幡大神社格天井絵	宮戸 107

番号	種　別	名　称	所　在　地
11	絵　画	絹本着色愛染明王画像	本庄 *
12	絵　画	紙本墨画鍾馗之図	銀座 *
13	絵　画	武正南盧筆絵画一括	西富田 *
14	絵　画	長泉寺開山堂格天井絵	児玉町高柳 901
15	彫　刻	木造阿弥陀如来三尊来迎仏	千代田 *
16	彫　刻	木造阿弥陀如来立像	牧西 *
17	彫　刻	石仏十一面観音坐像	西五十子 622-1
18	彫　刻	法養寺木造延命地蔵尊坐像	児玉町児玉 1258
19	彫　刻	長泉寺木造延命地蔵尊半跏坐像	児玉町高柳 901
20	彫　刻	成身院の三仏	児玉町小平 647
21	工芸品	大正院の不動剣	本庄 2-4-8
22	工芸品	長谷部若狭守国治銘脇差	駅南 *
23	工芸品	成身院百体観音堂の鰐口	児玉町小平 647
24	工芸品	法養寺の鰐口	児玉町児玉 1258
25	工芸品	唐銅造大日如来坐像	児玉町小平 647
26	古文書	小笠原忠貴筆建立祈願文	千代田 3-2-3
27	古文書	高山彦九郎自筆墓前日記	銀座 *
28	古文書	今井鈴木家中世文書	今井 *
29	古文書	天正十九年宮戸村検地帳（付・金井家文書一括）	宮戸
30	古文書	長泉寺中世文書	児玉町高柳 901
31	古文書	八幡山福田家中世文書	児玉町八幡山 *
32	古文書	金屋倉林家中世文書	児玉町金屋 *
33	古文書	飯倉富岡家中世文書	児玉町飯倉 *
34	考古資料	御手長山古墳出土人物埴輪	中央 1-2-3
35	考古資料	小島前の山古墳出土盾持人物埴輪	中央 1-2-3
36	考古資料	下浅見鷺山古墳出土品	中央 1-2-3
37	考古資料	寺山廃寺の風鐸	中央 1-2-3
38	歴史資料	開善寺境内絵図	中央 2-8-26
39	歴史資料	開善寺の御朱印箱	中央 2-8-26
40	歴史資料	茂木小平翁頌徳碑	千代田 3-2
41	歴史資料	西五十子の阿弥陀一尊種子板碑	西五十子 425
42	歴史資料	正観寺の算額	都島 864
43	歴史資料	小和瀬薬師堂自然石塔婆	小和瀬 178
44	歴史資料	和宮生母観行院拝領品	銀座 *
45	歴史資料	八幡神社の日清戦争絵馬	児玉町児玉 198
46	歴史資料	玉蓮寺釈迦一尊種子板碑	児玉町児玉 202
47	歴史資料	風洞の石幢	児玉町秋山 2825-1
48	歴史資料	実相寺阿弥陀一尊種子板碑	児玉町児玉 100
49	歴史資料	保木野の宝篋印塔板碑	児玉町保木野 *
50	歴史資料	保木野の円形光背図像板碑	児玉町保木野 *

* は個人所蔵

51	歴史資料	ほてい堂の五輪塔	児玉町小平 442
52	歴史資料	浄厳の画像及び墨跡	児玉町小平 445
53	歴史資料	寶龜二年銘木簡	中央 1-2-3

【市指定文化財・民俗文化財】

番号	種　別	名　称	所　在　地
1	有形民俗文化財	本庄宮本町の山車	千代田 3-1-2
2	有形民俗文化財	本庄泉町の山車	千代田 1-6-4
3	有形民俗文化財	本庄上町の山車	中央 3-3-5
4	有形民俗文化財	本庄照若町の山車	若泉 1-1-30
5	有形民俗文化財	本庄七軒町の山車	銀座 1-6-1
6	有形民俗文化財	本庄仲町の山車	中央 1-5-2
7	有形民俗文化財	本庄本町の山車	本庄 3-2-1
8	有形民俗文化財	本庄台町の山車	本庄 2-6-20
9	有形民俗文化財	八幡神社の能装束・能面	児玉町児玉 198
10	有形民俗文化財	長沖の庚申塔	児玉町長沖 49
11	有形民俗文化財	正楽寺の十一面観音	児玉町上真下 451
12	有形民俗文化財	本庄本町の神輿	本庄 3-2-1
13	有形民俗文化財	児玉新町の屋台	児玉町児玉 137-1
14	有形民俗文化財	児玉上町の山車	児玉町児玉 40-4
15	有形民俗文化財	児玉仲町の山車	児玉町児玉 2512-1
16	有形民俗文化財	児玉本町の山車	児玉町児玉 1257
17	無形民俗文化財	金鑽神楽・本庄組	千代田 3-2-3
18	無形民俗文化財	金鑽神楽・宮崎組	牧西 557
19	無形民俗文化財	仁手諏訪神社の獅子舞	仁手 353
20	無形民俗文化財	今井金鑽神社の獅子舞	今井 1124-1
21	無形民俗文化財	金鑽神楽・杉田組	四方田 288-1
22	無形民俗文化財	金鑽神楽・根岸組	児玉町小平 1051
23	無形民俗文化財	金鑽神楽・太駄組	児玉町太駄
24	無形民俗文化財	西小平の万作	児玉町小平
25	無形民俗文化財	元田の万作	児玉町元田
26	無形民俗文化財	小平の獅子舞	児玉町小平
27	無形民俗文化財	吉田林の獅子舞	児玉町吉田林

【市指定文化財・記念物】

番号	種　別	名　称	所　在　地
1	史　跡	小笠原信嶺夫妻の墓	中央 1-4(開善寺墓地)
2	史　跡	本庄城址	本庄 3-5
3	史　跡	二本松遺跡古墳時代集落跡	栄 2-7

4	史　跡	普寛上人の墓	中央 3-4
5	史　跡	小倉家の墓碑群	中央 3-3
6	史　跡	万年寺八幡山古墳	万年寺 3-3
7	史　跡	小島蚕影山古墳	小島 2-15
8	史　跡	小島山の神古墳	小島 2-15
9	史　跡	八幡神社の高札場	児玉町児玉 198
10	史　跡	秋山古墳群	児玉町秋山
11	史　跡	秋山庚申塚古墳　付出土品	児玉町秋山 1769-1
12	史　跡	太駄の高札場	児玉町太駄 908-1
13	史　跡	岩谷堂	児玉町小平
14	史　跡	平重衡の首塚	児玉町蛭川 214-3
15	史　跡	入浅見金鑽神社古墳　付出土品	児玉町入浅見 819
16	史　跡	長沖３２号墳	児玉町児玉南 2-9
17	史　跡	万年寺つつじ山古墳　付出土品	万年寺 3-3
18	史　跡	小笠原信之の墓	中央 2-8(開善寺墓地)
19	天然記念物	城山稲荷神社のヤブツバキ	本庄 3-5
20	天然記念物	本庄金鑽神社のカヤ	千代田 3-2-3
21	天然記念物	仲町愛宕神社のケヤキ	中央 1-5-2
22	天然記念物	東富田観音塚のマツ	東富田 50-1
23	天然記念物	沼和田宝輪寺のカヤ	沼和田 869
24	天然記念物	山王堂日枝神社のケヤキ	山王堂 228-1
25	天然記念物	沼和田飯玉神社のサイカチ	沼和田 926
26	天然記念物	保木野龍清寺のカヤ	児玉町保木野 387
27	天然記念物	思池のマルバヤナギ	児玉町児玉 1746
28	天然記念物	石神神社のケヤキとスギ	児玉町小平 1
29	天然記念物	八幡神社のヤブツバキと社叢林	児玉町児玉 198
30	旧　跡	陣見平	児玉町小平

【国登録有形文化財】

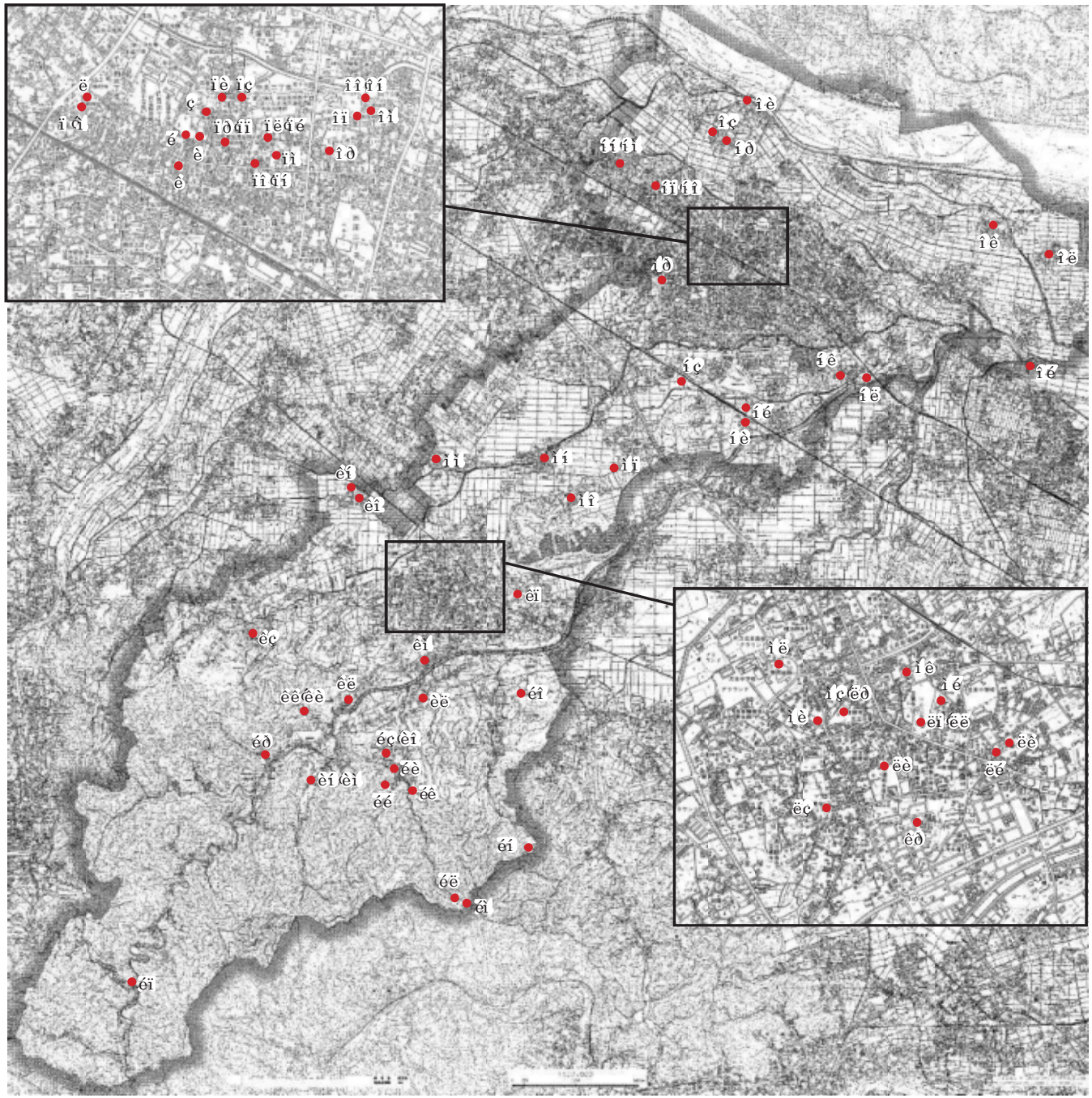
番号	種　別	名　称	所　在　地
1	産業・金融	旧本庄商業銀行煉瓦倉庫	銀座 1-5-16
2	産業・通信	旧本庄郵便局（本庄仲町郵便局）	中央 1-8-2
3	土木・上水道	児玉町旧配水塔	児玉町児玉 323-2
4	土木・貯水池	間瀬堰堤	児玉町小平
5	土木・貯水池	間瀬堰堤管理橋	児玉町小平
6	交通・道路	寺坂橋	中央 2
7	交通・道路	賀美橋	若泉 2
8	交通・道路	滝岡橋	本庄市堀田・深谷市岡

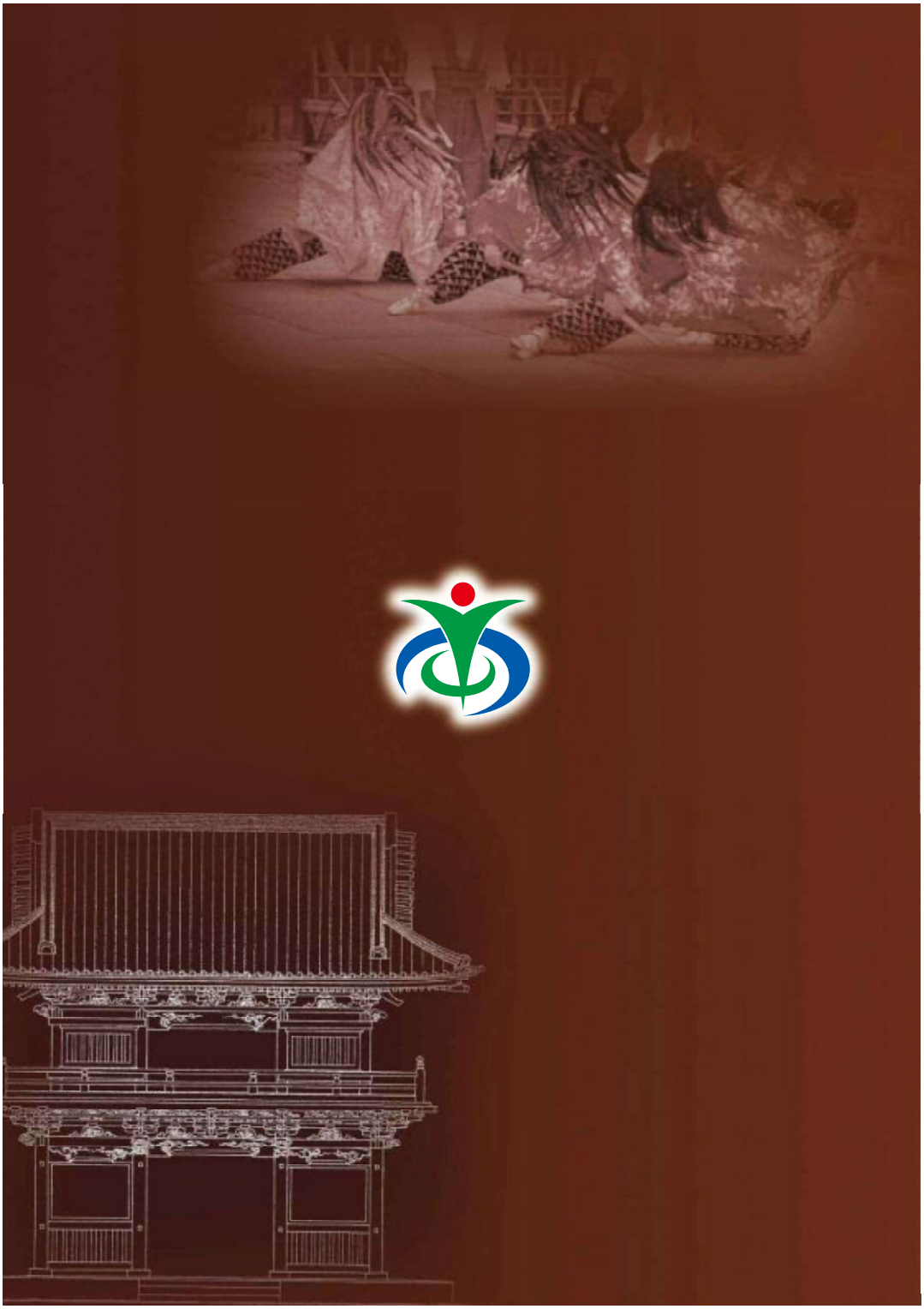
本庄市の文化財　散策ガイドブック

発行日　平成 29 年 3 月 31 日
発　行　埼玉県本庄市教育委員会
〒 367-8501
埼玉県本庄市本庄３－５－３
編　集　本庄市教育委員会文化財保護課
印　刷　山進社印刷株式会社

番	指定	名　称
1	県	金鑽神社社殿
2	県	金鑽神社のクスノキ
3	市	金鑽神社大門
4	市	金鑽神社のカヤ
5	市	茂木小平頌徳碑
6	登	旧本庄商業銀行煉瓦倉庫
7	市	小倉家墓地
8	市	安養院の本堂・総門・山門
9	市	普寛上人の墓
10	県	旧本庄警察署
11	市	田村本陣の門
12	県	諸井家住宅
13	登	旧本庄郵便局
14	市	仲町愛宕神社のケヤキ
15	県	絹本着色清拙正澄画像
16	市	小笠原信嶺夫妻の墓
17	市	小笠原信之の墓
18	登	賀美橋
19	登	寺坂橋
20	市	円心寺山門
21	市	本庄城址
22	県	城山稲荷神社のケヤキ
23	市	城山稲荷神社のヤブツバキ
24	県	台町の獅子舞
25	市	宮戸八幡大神社の格天井絵
26	市	小和瀬薬師堂自然石塔婆
27	登	滝岡橋
28	市	山王堂日枝神社のケヤキ
29	市	沼和田飯玉神社のサイカチ
30	市	沼和田宝輪寺のカヤ
31	市	小島山の神古墳
32	市	小島蚕影山古墳
33	市	万年寺八幡山古墳
34	市	万年寺つつじ山古墳
35	市	西五十子阿弥陀一尊種子板碑
36	市	石造十一面観音坐像
37	県	宥勝寺裏埴輪窯跡
38	県	荘小太郎頼家供養塔
39	市	東富田観音塚のマツ
40	市	二本松遺跡古墳時代集落跡
41	県	鷲山古墳
42	市	入浅見金鑽神社古墳

※本マップには本庄市の指定文化財の内、代表的なものを中心にその所在場所を表示しました。そのため通常は見学できないもの、管理上好ましくないものなど、所在位置を示していない文化財があります。



番	指定	名　称
43	市	平重衡首塚
44	市	正楽寺の十一面観音
45	県	雉岡城跡
46	県	競進社模範蚕室
47	市	玉蓮寺の釈迦一尊種子板碑
48	県	塙保己一遺品及び関連資料
49	県	木造阿弥陀三尊像
50	市	實相寺阿弥陀一尊種子板碑
51	県	八幡神社社殿及び青銅鳥居
52	市	八幡神社の随身門
53	市	八幡神社の能楽殿
54	市	八幡神社のヤブツバキと社叢林
55	市	八幡神社の高札場
56	市	法養寺の鰐口
57	市	法養寺木造延命地蔵尊坐像
58	登	児玉町旧配水塔
59	県	天龍寺の銅鐘
60	市	長沖 32 号墳
61	市	思池のマルバヤナギ
62	国	塙保己一旧宅
63	市	保木野龍清寺のカヤ
64	市	長沖の庚申塔
65	県	岡登景能の生地
66	県	骨波田の藤
67	市	長泉寺木造延命地蔵尊半跏坐像
68	市	長泉寺開山堂格天井絵
69	県	飯倉御厨跡
70	県	元田の板石塔婆
71	市	太駄の高札場
72	市	秋山古墳群・秋山庚申塚古墳
73	市	秋山十二天社社殿
74	市	陣見平
75	市	岩谷堂
76	市	ほてい堂の五輪塔
77	市	石神神社のケヤキとスギ
78	市	浄厳の画像及び墨跡
79	市	成身院百体観音堂
80	市	成身院百体観音堂の鰐口
81	市	唐銅造大日如来坐像
82	市	成身院の三仏
83	登	間瀬堰堤
84	登	間瀬堰堤管理橋
85	市	風洞の石幢

記号	指　定
国	国指定文化財
県	埼玉県指定文化財
市	本庄市指定文化財
登	国登録有形文化財